

## 【日本】日本の幼児教育・保育における社会情動的スキルとレジリエンスを育むための実践とその背景

### <目次>

第1章 はじめに 日本のECEC（幼児教育・保育）から就学前までの政策的・教育的・文化的背景 北野幸子

第2章 園長・施設長および主任へのインタビュー（予備調査） 佐藤朝美

第3章 保育者へのインタビュー（主調査） 佐藤朝美

第4章 予備調査・主調査の考察とSELの観点による保育方針の再考 佐藤朝美

第5章 指定討論「長期的な展望からみた幼児期のレジリエンスの問題」 星三和子

Appendix)

### <概要>

本カントリーレポートでは、日本のECEC（幼児教育・保育）における「社会情動的スキル」と「レジリエンス」を育む保育実践とその背後にある保育者の考え方や方針を明らかにすることを目的としている。まず第1章では、日本のECEC（幼児教育・保育）の歴史と現在の指針・要領について概説し、幼児教育が人格形成の基礎としてどのように位置づけられているか、そして「社会情動的スキル」と「レジリエンス」が現在の指針・要領にどのように反映されているかを解説している（第1章担当：北野幸子）。第2章の予備調査では、「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の用語の浸透度や実践の状況について、園長・施設長、主任を対象にしたインタビュー結果を報告している。第3章では予備調査の結果を踏まえ、保育者を対象に実施した主調査を通じて、「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の現場での理解と実践についての詳細を整理している。第4章では、これらの概念が保育者の保育方針にどのように組み込まれ、日々の保育活動を通じて子どもたちにどのように実践されているかを考察している。さらに、SEL（Social and Emotional Learning）の観点をを用いた分析を通じて、保育者が子どもたちのレジリエンスをどのように支援し、促進しているかについての洞察を提供する（第2章～第4章担当：佐藤朝美）。第5章の指定討論では、レジリエンスの概念が幼児期の発達に長期的な視野からどのように関わってくるかについて考察している（第5章担当：星三和子）。

以上、本カントリーレポートは、日本のECEC（幼児教育・保育）における「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の理解と実践に貢献するための実証的な知見と考察を提供する。

### 第1章 はじめに 日本のECEC（幼児教育・保育）から就学前までの政策的・教育的・文化的背景

日本の現行のナショナル・カリキュラム・ガイドラインである、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、要領・指針とする）は、2017年に告示された。明治維新以降、日本の最初の教育制度を定めた教育法令である学制（1872年）において、すでに保育施設における集団教育が構想され、1875年にはすでに幼稚遊嬉場という名称の園が、小学校に付設された（1年半で閉園）。当初より遊びによる子どもの育ちや学びの援助が目指されており、「誘導」ということばが使われるなど子どもの主体的な活動が大切にされており、環境を通して行うことが基本とされてきた。

明治以降の伝統を継承しつつ、現行の指針・要領（2017）のいずれにおいても、幼児教育が生涯にわた

る人格形成の基礎を培う重要なものとして位置づけられており、幼児期の特性を踏まえて、内容や方法が考えられることとなっている。日本の指針・要領においては「レジリエンス」ということばが使われているわけではないが、例えば、幼稚園教育要領の前文では「一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」とある。ここでは、個々の尊厳のもと、協働しつつ、社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の作り手となること、つまり、いわゆるレジリエンスを含めた生きる力を育むことが明示されている。

幼稚園教育要領（2017）では、教育において重視する事項として、以下の3つがあげられている（表1参照）。ここでの重要なキーワードとしては、「情緒の安定」、「主体的な活動」、「自発的な活動としての遊び」、「一人ひとりの特性に応じた教育（個別最適化教育）」が挙げられると考える。つまり、日本の園では、人格形成の基礎を培う幼児期の教育が目指され、その時期の特徴を踏まえた教育が不可欠とされている。実際に、要領・指針においては幼児期の特性として「自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる」ことがあげられている。これらも直接的ではないが、いわゆるレジリエンスの要素が含まれていると考える。

表1. 教育上の重視事項

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。</li><li>2. 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。</li><li>3. 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。</li></ol> |
|---|

保育の内容については、日本のナショナル・カリキュラム・ガイドラインは、小学校以降の教科教育を中心とするコンテンツ・ベースのものではなく、資質・能力ベースのものである。同ガイドラインでは、園において「育みたい資質・能力」と、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が示されている。前者については、以下の3つの資質・能力（表2参照）を一体的に育むように努めることとなっている。

表2. 育みたい資質・能力

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>(1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識および技能の基礎」</li><li>(2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」</li><li>(3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」</li></ol> |
|--|

後者については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されている（表3）。日本の要領・指針では、園における教育において育みたい資質・能力を、幼児の生活する姿から「ねらい」が捉えられている。そしてその「ねらい」を達成するために指導する事項が内容として、5つの領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）で示されている。なお、それらは、教科などの内容別に展開する教育とは異なり、園での子どもの生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであることが示されている。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、レジリエンスと深くかかわる内容がみられる。例えば、（2）自立心には「諦めずにやり遂げること」、（4）道徳性・規範意識の芽生えには「自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付け」ることなどが挙げられている。

表3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

（1） 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活を作り出すようになる。

（2） 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

（3） 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

（4） 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

（5） 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

（6） 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちあわせて関わるようになる。

(8) 数量・図形、文字等への関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

日本では、日本国憲法と児童の権利に関する条約にのっとり、こども施策を総合的に推進していくために、2023年4月にこども家庭庁が創設された。これまでは、園という施設における集団保育についての指針・要領のみであったが、家庭、園、地域におけるすべての子どもを対象とした、「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100カ月の育ちビジョン）」が、すべての子どものウェルビーイングを目指して2023年12月に閣議決定した。ここでは5つのビジョンが示されている（表4参照）。特に（2）では、要領・指針と同様に、豊かな遊びと体験が大切であることが示されており、「やり抜く力」、「相手や現実の状況と折り合いをつける力」、「葛藤やいざこざ」の経験、「試行錯誤」等の大切さについての言及がみられる。

表4. 幼児期までのこどもの育ちの5つのビジョン

(1) こどもの権利と尊厳を守る

(2) 「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める

(3) 「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える

(4) 保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする

(5) こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す

以上のように、日本のナショナル・カリキュラム・ガイドラインや昨今策定されたビジョンでは、人格形成の基礎を培う幼児教育の重要性が明示されており、資質・能力の育ちを大切にしていることが分かる。ガイドラインでは、直接的に「レジリエンス」という語を使ってはいないが、その要素が含まれていることが伺える。なお、日本の園では、ねらいとは、多様な体験が積み重ねられるなかで、単独ではなく相互に関連をもちながら、次第に達成に向かうものとされている。よって、例えば「レジリエンス」等、

特定の資質・能力を育むために、特定の活動が展開するのではなく、「レジリエンス」等が他の資質・能力と相互に関係しながら、次第に育まれていくものとして位置づけられている。その中で、保育者は、子どもの自発的な活動としての遊びを支える環境を整えることが期待されている。

**【北野幸子】**

## **第2章 園長・施設長および主任へのインタビュー（予備調査）**

主調査実施に向けて、予備調査を行う。予備調査の目的は、各園における「レジリエンス」や「社会情動的スキル」という用語の浸透度や実践状況の概要を把握することである。そこでまず、園長・施設長や主任を対象に、関わる園や施設の状況についてインタビューを行う。予備調査の結果を踏まえ、主調査での保育者へのインタビュー内容や方法を検討する。

予備調査の実施時期は2023年9月、参加者の属性は表2-2の通りであり、インタビューは2人1組のグループに対し約1時間ずつ、Zoomを用いた遠隔通話により行った。なお、予備調査について事前の説明を行い、参加者から同意書を提出してもらった。また、調査実施時には、インタビューが自由意志によるものであり、途中で中止しても不利益が生じないことを伝えた上で開始した。まず、経歴について伺ったのち、半構造化インタビューの方法を取り、以下に示す質問項目を尋ねた（表2-1）。この調査は、愛知淑徳大学の倫理審査を経て承認されたものである（倫理審査番号2023-004）。

表2-1 予備調査の質問項目

### **質問1：「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？**

- 1 ことばを知っており意味もよく知っている
  - 2 ことばを知っており意味は少し知っている
  - 3 ことばは知っているが意味は知らない
  - 4 ことばも意味も知らない
- 回答が1・2の場合・・・
- ・ あなたは「社会情動的スキル」をどういう意味で捉えていますか？
  - ・ 社会情動的スキルが高い子どもとはどんな子でしょうか？
  - ・ 子どもの社会情動的スキルを育むことは大事なことだと思いますか？
  - ・ どのような社会情動的スキルを育てることが大事だと思いますか？

<下記を説明>

「社会情動的スキル」とは、「感情の制御」「セルフコントロール」「他者とのかかわり」などと定義される力です。

### **質問2：あなたの園の先生方は、「社会情動的スキル」ということばを知っていると思いますか？**

- 1 ことばを知っており意味もよく知っていると思う
  - 2 ことばを知っており意味は少し知っていると思う
  - 3 ことばは知っているが意味は知らないと思う
  - 4 ことばも意味も知らないと思う
- 回答が1・2の場合・・・
- ・ 園の先生方は「社会情動的スキル」をどういう意味で捉えていると思いますか？

**質問3：「レジリエンス」ということばを知っていますか？**

- 1 ことばを知っており意味もよく知っている
- 2 ことばを知っており意味は少し知っている
- 3 ことばは知っているが意味は知らない
- 4 ことばも意味も知らない

回答が1・2の場合・・・

- ・ あなたは「レジリエンス」をどういう意味で捉えていますか？
- ・ レジリエンスがある子どもとはどんな子でしょうか？
- ・ 子どものレジリエンスを育むことは大事なことだと思いますか？

<下記を説明>

■CRNA 事務局で共通で理解した表現：

- ①逆境下でもうまくやり抜く能力、問題と折り合いをつける過程、大惨事からの回復、トラウマ後の成長、頓挫したり不適応に陥ったりする危険性が高かったにもかかわらずうまく成長を遂げること（Masten）
- ②失敗や否定されることに対処したり、逆境に立ち向かって前に進んでいくこと（OECD）

■要領・指針の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」より、レジリエンス概念に近い表現：

- (2) 自立心の中で表現される「諦めずにやり遂げる」
- (4) 道徳性・規範意識の芽生えの中で表現される「自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら」

**質問4：あなたの園の先生方は、「レジリエンス」ということばを知っていると思いますか？**

- 1 ことばを知っており意味もよく知っていると思う
- 2 ことばを知っており意味は少し知っていると思う
- 3 ことばは知っているが意味は知らないと思う
- 4 ことばも意味も知らないと思う

回答が1・2の場合・・・

- ・ 園の先生方は「レジリエンス」をどういう意味で捉えていると思いますか？

**質問5：レジリエンスの実践について**

- ・ 「社会情動的スキル」や「レジリエンス」などのことば自体は知られていなかったとしても、その育みにつながりそうな活動は、園で行われていますか？  
行われている場合・・・
- ・ 次の主調査でその活動内容について伺いたいのですが、どのような聞き方をすれば、現場の先生に伝わると思われますか？

たとえば、

「感情の制御」「セルフコントロール」

「他者とのかかわり（engaging with others）」「共同・協同・協働（collaboration）」

「困難に適応して回復する力」などを育むための活動、

「失敗や否定されることに対処する」「逆境に立ち向かって前に進んでいく」

「自分の気持ちを調整し友達／問題と折り合いをつける」

「諦めずにやり遂げる」

と言えませんか？

**質問6：レジリエンス・社会情動的スキルについて**

- ・ あなたから見て、あなたの園の先生方は、子どもたちにレジリエンスや関連する社会情動的スキルを育むために、どのようなアプローチをとっておられますか？具体的な活動や実践の内容について、ご存知の範囲で教えてください。

レジリエンスや関連する社会情動的スキルを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものがあれば教えてください。

表 2-2 参加者の属性：異なる幼児教育・保育施設に勤める 4 名

回答者	園種	現役職	職歴	保育資格	性別	年代
A	行政	センター職員	32 年	保育士・幼稚園教諭	女性	50 代
B	私立保育所	主任	15 年	保育士・幼稚園教諭	女性	30 代
C	私立保育所	主任	13 年	保育士・幼稚園教諭	女性	30 代
D	幼稚園型認定こども園	教頭	9 年	保育士・幼稚園教諭	男性	30 代

**質問 1：「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？**については、4 名中 2 名が「よく知っている」、残り 2 名が「少し知っている」であった。そこで、どういう意味で捉えているか確認したところ、以下のような回答であった。

回答者 (A) 「乳幼児教育ビジョン」というものを作っていて、OECD 等の資料も参考にした。非認知能力。これからはこういう力が必要だということで、ビジョンを作る参考にした。社会情動的スキルとして、好奇心・探究心・自己肯定感・有能感・自分を大切にできる力・思いやり・学びに向かう力。一番は主体性。

回答者 (B) 言葉は聞いたことはあるが、あまり詳しくわかってないかもしれない。社会のスキルとして、諦めない心、自分を自制するためにも使っていくスキルが大切だということをニュアンスでふんわりと知ってるような感じ。

回答者 (C) ことばとしては研修等で最近よく聞くようになってきたが、うまく活用して生活するまでには自分の中に入ってきていない。保育の中では感情のコントロールというイメージ。保護者含め多様な家庭が増えており、情動的なところ、集団生活が苦手なお子さんが増えてきている。多様な子どもたちに対応できるようにという考え方は園全体でも進んできている。

回答者 (D) 意味としては OECD の定義で理解。ただし現場では研修会などでしか聞かないところが多いのではないかと。「非認知的スキル」の方が一般的。ただし「非認知的スキル」は定義が曖昧なまま進んでおり個人的にまずいと捉えている。社会情動的スキルが高い子どもは、コミュニケーション能力が高い、協調性がある、協同的に遊ぶ。人間社会で生きていく中で、特に乳幼児教育で培うことは大事。育てるのが大事と思うのは、自己主張や自己抑制をしながら、仲間や集団コミュニティと一緒に進んでいくスキル。

園長・施設長や主任の間で「社会情動的スキル」に対する認識は多様であることが分かった。将来の教育における重要なスキルであると詳細に理解している者もいれば、用語のみ知っており大まかに理解している者もいた。重要性についての共通認識はあるが、その定義や実践への具体的な応用に関しての回答はあまり得られなかった。

**質問 2：あなたの園の先生方は、「社会情動的スキル」ということばを知っていると思いますか？**については、4 名中 2 名が「ことばを知っており意味は少し知っていると思う」、残り 2 名が「ことばは知っているが意味は知らないと思う」であった。園の先生方は、「社会情動的スキル」をどういう意味で捉えていると思うか聞いたところ、以下のような回答であった。

回答者 (A) 言葉として理解しているかは不明。難しい。主体性を「ビジョン」で掲げているので、大事にしたいという意識は持っている。園によって差がある。全員が理解しているかは不明。主体性といっても大きな定義である。子どもが主体的にあることが重要。「ビジョン」にはコミュニケーション力もいれている。

回答者 (B) 一人一人のペースを大切に、というのは、園でも実践している。まず、自分でやりたいという気持ちがあ

り、そこに友達が加わっていくというように、スモールステップで関わっていこうと心がけている。

回答者 (C) 知っている先生は、コミュニケーションの意味で捉えがち。

回答者 (D) コミュニケーション、対人関係でどうするか、伝えるとか話せるとかの文脈が非常に多い。各子どもの中に存在している、自分で自分を励ます力 (self-compassion) という力よりも、対人関係の文脈で捉えている。

**質問3：「レジリエンス」ということばを知っていますか？**については、「ことばを知っており意味もよく知っている」が1名、「少し知っている」が3名であった。レジリエンスの詳細について尋ねたところ、下記のような回答であった。

回答者 (A) 小学校の研究会で出てきた。自分の気持ちを調整 (自己調整)、自分の気持ちを立て直したり、折り合いをつけたりする力としてとらえている。「我慢する力」と誤解を招きやすいのではないかと気になっている。

回答者 (B) 心理発達研修で少し聞くくらい。困難なことを乗り越えていく力。

回答者 (C) ことばとして日頃使っていない。柔軟性があるお子さんというイメージ。

回答者 (D) 跳ね返す、適応する、ゴムのイメージ。ギュッと握ってまた膨らむ。色んな環境に行っても、何か困難があっても跳ね返したり、挑戦したりするイメージ。レジリエンスがある子として思い浮かぶのは、幼小接続の文脈で、小学校に行ったときに色んな授業スタイルがあり、面白くなくてもがんばろうと考えるタイプの子、つらくてもできる子。これからのストレス社会で生きていくために非常に重要な要素だと思うし注目している。

「レジリエンス」に対する理解は、教育現場ごとに表現が異なる回答であった。困難なことを乗り越えたり、折り合いをつけたりするような認識は共通してみられた。ただし、「我慢する力」と誤解を招きやすいとの指摘もあり、慎重な取り扱いが必要である。

次に、改めて CRNA 事務局が捉えているレジリエンスについての概要を伝え、**質問4：あなたの園の先生方は、「レジリエンス」ということばを知っていると思いますか？**について尋ねたところ、4名中1名が「ことばは知っているが意味は知らないと思う」、残り3名が「ことばも意味も知らないと思う」と回答した。詳細について尋ねたところ下記のような回答であった。

回答者 (A) あまり知らない気がする。「10の姿」でとらえると、よく理解されている。失敗も体験して、そこから次こうしてみたいとか、チャレンジしたり、もう1回やってみようという気持ちを大事にして、失敗しても大丈夫だよとか、それが自立心、心の学びに繋がっていくだろうか。

回答者 (B) 「レジリエンス」と聞くとわからない。しかし、乗り越えていくという点や、やり遂げていくということとしては、園でも支援としてもやっていることである。

回答者 (C) 「レジリエンス」ということばは使っていないが、(レジリエンス概念の説明を受けて) 柔軟性、諦めずに取り組む力などは、日々の保育でかなり意識している。小学校に向けて、苦手なことにも挑戦して諦めずにやったり、自分が苦手なことを知るところから、保育現場でも行っている。

回答者 (D) 職員との会議でことばを使ったことがある。聞いたことはあるけど復習しないといけない、みたいな状態だと思う。レジリエンスというのは、困難なことがあってもやろうとするという文脈が多いとは思いますが、一方で無意識的に、意図せずともレジリエンス的なことを先生がしゃべっているのかなと思うことがある。たとえば愛着に何か課題があったり、家庭背景の問題があるお子さんに対して、どう本人がそれに対処するかという話が先生から出ることがある。

多くの保育者は、「レジリエンス」という用語自体には馴染みが薄いかもしれないが、「10の姿」など具体的な行動や心の持ちようとしては、日々の保育において意識されているのではないかと、この回答であった。失敗を乗り越え、チャレンジする精神や自立心の育成に繋がる行動は、レジリエンスを育てるためのものと理解されている。実際には、柔軟性や挑戦する力を大切に、困難な状況にも前向きに取り組

む保育を行っていることが多い様子であった。

**質問5：レジリエンスの実践について、下記2点について尋ね、回答が得られた。**

- ・ 「社会情動的スキル」や「レジリエンス」などのことば自体は知られていなかったとしても、その育みにつながりそうな活動は、園で行われていますか？
- ・ 行われている場合、次の主調査でその活動内容について伺いたいのですが、どのような聞き方をすれば、現場の先生に伝わると思われますか？たとえば「感情の制御」「セルフコントロール」「他者とのかかわり（engaging with others）」「協働（collaboration）」「困難に適応して回復する力」などを育むための活動、とえば分かると思われますか？

回答者（A）自分たちがどう関わるか、失敗しないように避けるのではなく、子どもが自分で気づくのを待つ・見守り。正解など、正しい答えを求めることが園ではない。思いに寄り添うことは、活動を通して、子どもが好きなこと、やりたいことを見つける＝遊びや主体性につながる。先生方は、好きなこと・興味を見つけて場所を整える。その子供がどうしたいかを待つ、友だちが大事にしている。相手の気持ちを代弁してあげることは、市の中でも決めていく。

回答者（B）「活動」というと出し辛い。子どもの成長の基本として、遊びの中での成長、子どもが好きな遊びを見つけ、遊びこめるようにサポートすることと考えている。子どもが困難を乗り越える機会として思いつくことがあるかー「遊び」の中で教えて行こうというのは園の基本である。子どもは集団の中では、なかなかうまく気持ちが出せず、言葉がうまく出せず、友だちを押してしまったりする。また、少人数の遊びとして、カード遊びで、こういう言葉を使うということを伝える等はしている。遊びの中から繋がっていった。例えば、順番のある遊びで、順番が経験できたり。「活動」として聞くと難しい、「保育者がどう関わるか、どんな関わりを望んでいるか」という聞き方がわかりやすいかもしれない。

回答者（C）自分の園では、ことばとしての認知は低い。研修で出てくる専門的なことばと現場が結びつかないことも多い。しかし掘り下げていくと、保育の中では絶対取り入れている。（インタビューーからの表現の例示を受けて）このくらいかみ砕くと伝わりやすいと思うが、これらのスキルが全部つながっているという認識は低い。1個1個のスキルにとらわれがち。

回答者（D）育みにつながる活動は十分行われている。例示について、下の4行（レジリエンスをかみくだいた表現）はすぐ分かるが、最初に書かれた「感情の制御」という表現が気になる。制御には主張と抑制と両方あるが、我慢（制御）と捉える保育者が多く、言い返したりしながら（主張）自分で調和をとる部分が含まれない可能性があるため、補足があった方が分かりやすい。「セルフコントロール」と「感情の制御」の住み分けが難しい。「きょうどう」は要領や指針では「協働」ではなく「協同」と表現されているのではないか。

園での活動について尋ねる際は、「保育者がどう関わるか」という形で聞くと、保育者が理解しやすいとのことであった。「感情の制御」「セルフコントロール」「他者との関わり」「協働」「困難に適応して回復する力」などの表現を使うことで、社会情動的スキルやレジリエンスを育む活動を具体的に伝えることができる。しかし、「感情の制御」については補足が必要で、「協働」よりも「協同」の表現が適切かもしれない。遊びを通じた子どもの成長支援が基本であり、これらのスキルが連動していることの認識を深めることが重要だとの指摘があった。

**質問6：レジリエンス・社会情動的スキルについて、下記2点について尋ね、回答が得られた。**

- ・ あなたから見て、あなたの園の先生方は、子どもたちにレジリエンスや関連する社会情動的スキルを育むために、どのようなアプローチをとっておられますか？具体的な活動や実践の内容について、ご存知の範囲で教えてください。

- ・ レジリエンスや関連する社会情動的スキルを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものがあれば教えてください。

回答者 (A) 社会情動的スキルやレジリエンスを育む教材としては、聞いたことはない。遊びを通じて、子どもの興味関心から学ぶと考えると、そうしたプログラムは使いにくいものになるかもしれない。

回答者 (B) 子どもの自由さを大切に、いろいろな使い方をしたいので、これなら确实ということは、なかなか思い浮かばない。そのつもりでなかった遊具が、その目的で使われることもあるのかもしれない。

回答者 (C) 発達支援、インクルーシブ保育。環境設定。自由遊びをどう充実させていくか。コーナー分け、お部屋だけでなく廊下にも色んなスペースを作り、遊び自体もスペースも自分たちで選択できるようにする。自分で選んで表現する、楽しむ、楽しんでいるところを認められる経験を意識しながらの環境構成。苦手なことにもチャレンジしてほしいので、職員間で、その子のいまの現状を知ることが重要視している。子ども一人ひとりにどこまで求めるかの見極めを意識してやるように言っている。自己肯定感を育てていくことも重視。

回答者 (D) 自由遊びをどれだけ大切にするか。あいまいなおもちゃや素材（様々な展開ができるたわしやチェーンリングなど）を提供することで、子どもたちの間でのイメージのズレの調整が生まれ、自己制御機能を多様にする。また、自分で選択できること、どれだけ自分で判断して自分でやった感を持てるかの重視。みんながやったことと個々で取り組むことの差別化。さらに、環境構成と保育者の援助。子どもたちの理屈に乗っかりながらイメージを広げていくことが、情動的スキルの育みや想像力を広げることにつながる。なお自分で跳ね返していく力を育むためには self-compassion（自分で自分を励ます力）が大事なので、振り返りのときには課題から述べるのではなく、まずよかった点を振り返ることが大事。

園でのレジリエンスや社会情動的スキル育成には、特定の教材よりも遊びを通じたアプローチが重視されている。自由遊びや興味関心に基づく活動が中心で、子どもたちが自ら選び、表現し、挑戦する環境を大切にしている。環境設定では、様々なスペースを提供し、子どもたちに選択肢を与えることで、自己表現や自己肯定感を育むことを意識していた。また、あいまいなおもちゃや素材を用いた活動では、子ども同士の協働や自己制御のスキル向上を図っていた。職員間で子ども一人ひとりの現状を共有し、適切な支援を行うことも重視されており、self-compassion（自分で自分を励ます力）にも着目している。

最後に、回答者からは主調査へ向けてのアドバイスを頂いた。レジリエンスや社会情動的スキルを保育者に伝える際には、学術用語を避け、実際の保育の場面や経験に即した問いかけをすること、日常の保育現場で起こる具体的な状況や子どもたちとの関わり方を例に出し、それにどのように対応しているかを聞くことが有効であるとの教示が示されたため、主調査で採用することとなった。

**【佐藤朝美】**

### 第3章 保育者へのインタビュー（主調査）

主調査の目的は、保育現場の担い手である保育者を対象に、「レジリエンス」や「社会情動的スキル」の認識やそれらを育むための具体的な実践方法、その実践の背景や考えについて明らかにすることを目的としている。

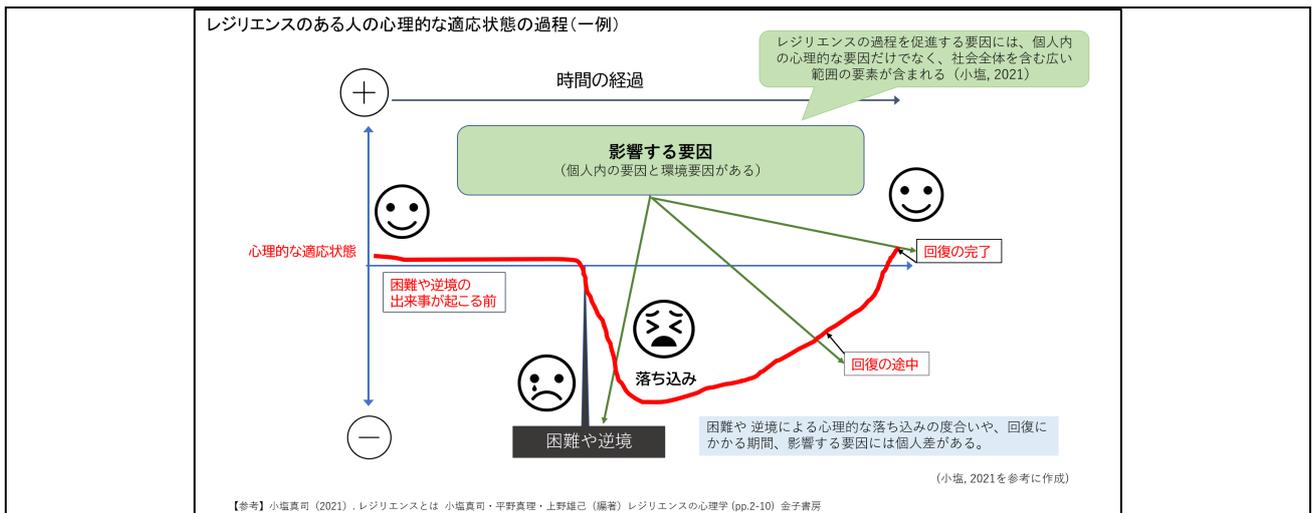
予備調査において明らかになったことは、保育者たちが「レジリエンス」や「社会情動的スキル」という学術用語を知らない場合でも、実際にはこれらを大切に、育むよう実践しているということである。この結果を踏まえ、主調査のインタビュー内容を調整した。具体的にはまず、インタビューの途中で用語への認識を一致するフェーズを設けた点である。次に、日常の保育現場で起こる具体的な状況や子ども

たちとの関わり方を例に出し、それらに答えてもらう項目を設けた。

参加者の属性は表 3-2 の通りであり、インタビューは一人に対し約 1 時間、Zoom を用いた遠隔により行った。なお、予備調査と同様に、主調査について事前の説明を行い、参加者から同意書を提出してもらった。また、調査実施時には、インタビューが自由意志によるものであり、途中で中止しても不利益が生じないことを伝えた上で開始した。まず、経歴について伺ったのち、半構造化インタビューの方法を取り、以下に示す質問項目を尋ねた（表 3-1）。この調査は、愛知淑徳大学の倫理審査を経て承認されたものである（倫理審査番号 2023-004）。

表 3-1 主調査の質問項目

<p><b>質問 1：「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？</b></p> <p>1 ことばを知っており意味もよく知っている 2 ことばを知っており意味は少し知っている 3 ことばは知っているが意味は知らない 4 ことばも意味も知らない</p> <p>回答が 1・2 の場合・・・</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ あなたは「社会情動的スキル」をどういう意味でとらえていますか？</li><li>・ どのような社会情動的スキルを育てることが大事だと思いますか？（あなたの国や文化において／保育者個人として）思いつくスキルをいくつでもあげてください。</li><li>・ 社会情動的スキルが高い子どもとはどんな子でしょうか？</li><li>・ 子どもの社会情動的スキルを育てることは大事なことだと思いますか？</li></ul> <p><b>質問 2：「レジリエンス」ということばを知っていますか？</b></p> <p>1 ことばを知っており意味もよく知っている 2 ことばを知っており意味は少し知っている 3 ことばは知っているが意味は知らない 4 ことばも意味も知らない</p> <p>回答が 1・2 の場合・・・</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ あなたは「レジリエンス」をどういう意味でとらえていますか？</li><li>・ レジリエンスがある子どもとはどんな子でしょうか？</li><li>・ 子どもへのレジリエンスの育成は大事なことだと思いますか？</li></ul> <p><b>質問 3：「社会情動的スキル」や「レジリエンス」などの用語を知っている／聞いたことがあるとしたら、どこで学ばれましたか？</b></p> <p>&lt;下記「レジリエンス」の定義を説明し、考え方を共有する&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 逆境／困難な状況にもかかわらず、うまく適応する力</li><li>・ 逆境や困難があったときに bounce back（立ち直る力／心の回復力）する力</li></ul> <p>※レジリエンスの概念には様々な解釈があります。</p> <p>我々が今回の調査で注目するレジリエンスの概念を、ことばと図で示します。</p> <p>※参考：</p> <p>レジリエンスの概念に関連する社会情動的スキル「感情の制御」「セルフコントロール」「他者とのかかわり」など</p>
---



#### 質問4：「レジリエンス」について

- ・ あなたが想定する4歳～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」とはどのようなことですか？
- ・ あなたが想定する4歳～6歳にとっての「うまく適応する」「立ち直る」とはどのようなことですか？

#### 質問5：保育の中で、「レジリエンス」の概念を考慮されていますか？

- ・ あなたやあなたの同僚の先生は、子どもたちにレジリエンスを育むために、どのようなアプローチをとっておられますか？
- ・ 具体的に園の実践や活動の中で、どのような場面がありますか？
- ・ また、レジリエンスを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものがあれば教えてください。

#### 質問6：園や日常生活の場面において、レジリエンスのスキルに関連するシナリオをご紹介します。4つのシナリオから2つかそれ以上を選び、選んだそれぞれのシナリオの子どもに対して、「保育者としてどう関わるか」「それはなぜか」を教えてください。

- 1) 友だちから仲間外れにされた (仲間に入れてもらえなかった)
- 2) 友達と喧嘩した
- 3) 親しい周囲の人 (大好きな先生や仲良しの友達など) が引っ越していなくなってしまった
- 4) 家庭内で辛いことがあった  
(親に叱られた、親同士の喧嘩、家庭内の雰囲気良くないなど)

#### 質問7：子どもたちのレジリエンスの到達状況をどのように測定/評価/判断されますか？

- ・ 子どもたちのレジリエンススキルの到達状況を測定するためのアセスメントツールはありますか？そのアセスメントツールの中身はどのようなものですか？ (可能な方のみご回答ください)

#### 質問8：子どものレジリエンス到達状況について、保護者にフィードバックをされますか？

- ・ フィードバックを行うとしたら、その中身はどのようなものか？ (可能な方のみご回答ください)

表3-2 参加者の属性：異なる幼児教育・保育施設に勤める11名

回答者	園種	現役職	職歴	担当	性別	年代
E	認可保育所 (私立)	担任	22年	4歳児 (年中)	女性	40代
F	認可保育所 (私立)	担任	3年	5歳児 (年長)	女性	20代

G	国立幼稚園	担任	19年	5歳児（年長）	男性	40代
H	市立幼稚園	主任	19年	5歳児（年長）	女性	40代
I	認可保育所（公立）	担任	5年	5歳児（年長）	女性	20代
J	認可保育所（公立）	担任	6年	4歳児（年中）	女性	20代
K	認定こども園	副主任	5年	4歳児（年中）	女性	20代
L	公立幼稚園	主任	15年	5歳児（年長）	男性	30代
M	公立幼稚園	主任	15年	5歳児（年長）	女性	30代
N	認可保育所（公立）	担任	3年	5歳児（年長）	女性	20代
O	認可保育所（公立）	担任	12年	5歳児（年長）	女性	30代

**質問1：「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？**については、11名中2名が「よく知っている」、7名が「少し知っている」、2名が「ことばは知っているが意味は知らない」であった。そこで、「よく知っている」「少し知っている」と答えた参加者に、どういう意味で捉えているかについて回答してもらった（Appendix：質問1）。

捉え方としては、社会情動的スキルを認知ではない「非認知能力」として考えている人が多かった。子どもたちが自分の気持ちをコントロールしつつ、人と協同する力、意欲や自己決定力などを含み、人格形成の基礎となる部分と捉えていた。自分の思いを伝え、試行錯誤しながら目標に向かう力という点を重要視していた。

社会情動的スキルが高い子どもとして、自分の意見をしっかりとと言えるだけでなく、相手の立場を考慮し、うまく伝える方法を見つけ、困難に直面しても諦めずに対処できる子どもを挙げていた。保育では、子どもたちが自信をもち、自分の考えを積極的に表現し、友達との関わりや集団での協同を通じて社会性を高めるための支援が必要との言及が見られた。

社会情動的スキルは、子どもたちが将来、社会に出たときにも役立つ重要な資質であり、幼少期にこれらを培うことの重要性を指摘していた。

**質問2：「レジリエンス」ということばを知っていますか？**については、11名中2名が「よく知っている」、2名が「少し知っている」、3名が「ことばは知っているが意味は知らない」、4名が「ことばも意味も知らない」であった。そこで、「知っている」と回答した方に、どういう意味で捉えているかについて回答してもらった（Appendix：質問2）。

捉え方としては、レジリエンスを困難な状況に直面した際に挑戦し続ける力、乗り越える力として理解していることが共通していた。失敗や困難から回復し、前向きに挑戦し続ける精神力であるとの言及もあった。

レジリエンスが高い子どもとして、挑戦に失敗しても諦めず、自分自身が受け入れられていると感じることで、再び挑戦する勇気を持つ子どもという特徴が挙げられた。

子どもたちが将来直面するであろう様々な挑戦に対処するための基盤を築くために、幼児期にレジリエンスを育むことが重要であるという回答があった。また、保育を通して、コミュニケーションスキルや友達との関わりや問題解決能力を含むレジリエンスを育てていくことが必要との認識があり、保育の場でレジリエンスを育む機会を提供しているとの回答も得られた。

質問3：「社会情動的スキル」や「レジリエンス」などの用語を知っている／聞いたことがあるとしたら、どこで学ばれましたか？については、「知っている」と回答した人の多くは研修を挙げている。レジリエンスについては知らなかった人が多く、2名の方が本インタビューを受ける前にネット等を通して調べたと回答していた。

質問4：「レジリエンス」について、「あなたが想定する4歳～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」とはどのようなことですか？」の質問には以下の回答があった（Appendix：質問4）。

まず、この時期の「困難」や「逆境」として、自分自身の期待と実際の能力の間にギャップがあること、集団内での自己の苦手さを認識すること、自分の限界や苦手なことを認識することなどが多く挙げられていた。具体的には、日常生活の中での運動や絵画などの活動において、さらに新しい遊びに挑戦する際に見られるとのことである。これらの活動に対して、苦手意識をもつことで楽しく取り組めないこと、自分の思いや目標をうまく進められないことが挙げられていた。

次に、友達とのトラブル、友達との関係作りの難しさなどが挙げられていた。例えば、友達との遊びで自分の思いが伝わらない状況において難しさが見られるという。

その他、年齢毎に異なる経験として、入園時は、親との別れや集団生活開始時で感じる我慢、年齢が上がると、自分たちで考えたプロジェクトやクリエイティブな活動がうまく実現できない経験、集団活動での他の子どもたちとの比較、協力の中で自分の役割や能力を理解する過程にも困難があると言及されていた。

これらの困難や逆境は、子どもたちが自立や社会性を身につけるための重要な機会ともなり、これらの挑戦を乗り越える中で、レジリエンスや社会情動的スキルが育まれるという認識が共通していた。

「あなたが想定する4歳～6歳にとっての「うまく適応する」「立ち直る」とはどのようなことですか？」の質問には以下の回答があった（Appendix：質問4）。

まず、この時期の困難や逆境には、自分自身の期待と現実のギャップ、集団内での役割や能力の比較、苦手なことへの挑戦、友達との関わりでのトラブルや意見の相違などが挙げられている。

「うまく適応する」ために、自分を落ち着かせるためのアイテムの使用、成功体験の積み重ね、スモールステップでの前進、自分に自信を持つことが必要であると回答があった。そこで、大人の肯定的な言葉がけや、苦手なことへの挑戦を支える環境の提供、友達からの学びや支援を受け入れることを促すことも重要な支援であると言及があった。

「立ち直る」については、失敗や挑戦から学び、自分なりの方法を見つけること、何度も挑戦して適応していくことが挙げられた。立ち直る過程において、助けを求めること、人の助けを借りて課題を解決すること、友達と協力して目標を達成することも重要な要素であると言及があった。

子どもたちが新しい活動に挑戦したり、集団で1つの目標に向かったりする過程で多くの困難や逆境に出会う。そこで失敗をしても諦めずに少しずつ成功体験を重ねたり、友達に自分の思いを言葉にして伝え合うことで折り合いをつけたり、目標を達成することで、適応力と立ち直る力を育てていくという共通の認識があった。

**質問5：保育の中で、「レジリエンス」の概念を考慮されていますか？**に関する回答では、多方面で子どもたちのレジリエンス育成に向けた取り組みが行われていた（Appendix：質問5）。

まず、保育における活動を通じて、子どもたちが自分への期待と実際のパフォーマンスの違いに気づき、それに対応する力を育てようとしている。また、友達との関わりや気持ちの落ち込み、パニック時には、リソースルーム（子どもが一人になって気持ちを落ち着かせることができる場所）のような環境整備を行い、子どもたちが自分の気持ちをコントロールしやすくしているとの回答もあった。

さらに具体的な取り組みとして、運動会や発表会、日常の遊びや活動が挙げられた。子どもたちに自分で挑戦したいと思える活動を提供し、挑戦し克服する体験を促進している。その過程において、保育者からの肯定的な言葉がけや、友達からの学びや支援を受け入れることなどを通して、子どもたちが自信を持ち、困難に立ち向かう気持ちを育んでいる。

保育の場では、特定の教材やプログラムよりも、日常生活や遊びの中で楽しみながら自然にこの力が育っていくことを重視しており、子どもたちが自分で考え、行動する機会を増やしている。また、職員間の協力とサポートを通じて、共通の目標に向かって協力していることも、レジリエンス育成における重要な要素として挙げられていた。

保育の現場において、レジリエンスの育成が日々の保育活動や遊び、挑戦の中で行われており、子どもたちが自立し、困難を乗り越える力を身につけることを目指している様子への言及が多くみられた。

**質問6：園や日常生活の場面において、レジリエンスのスキルに関連するシナリオをご紹介します。4つのシナリオから2つかそれ以上を選び、選んだそれぞれのシナリオの子どもに対して、「保育者としてどう関わるか」「それはなぜか」を教えてください。**をたずねた。

**1) 友だちから仲間外れにされた（仲間に入れてもらえなかった）**について、6名が選択した（Appendix：質問6-1）。

まず保育者として、仲間外れにされた子の気持ちを受け止めることから開始する。そして、仲間はずれにされた子が、一方的な理解で状況を捉えている場合が多いため、相手の意見や理由を聞く。仲間外れをした子どもたちとされた子どもとの間で対話の場を設け、互いの気持ちを伝え合わせることで、理解と受容の促進を図る。もし、勘違いのようであれば、仲間に入れてもらうような行動を促す。ただし、仲間外れの背景には、遊びの好みや選択の違いがあることもあるため、その場合は、子どもたちの異なるニーズや好みに応じたサポートを提供する。これらの対応の背景には、仲間はずれにされた子も、仲間はずれにした子に対しても、子どもが自分の気持ちを受け止めてもらえることが一番重要であるという認識が共通していた。

時には、個人名を特定せず、クラス全体でその事象を共有することもある。状況について、子どもたちの意見や感情を聞き、仲間外れにする代わりにの行動や、仲間はずれにされた時の反応の仕方をクラス全体で考える機会を作り、子どもたちに問題が生じた時に皆で話せる環境があるということを理解させることも大切な支援として考えているという言及があった。

概ね保育者は、子どもたちが仲間外れにされた際、まずは受容を大切にし、対話の促進、相互理解と、自尊心を損ねることのないよう支援につとめる。その際、仲間はずれにされた子だけでなく、仲間はずれをした子の気持ちも尊重し、みんなが仲良くすることを強要しない点が重要であるとの認識があった。

## **2) 友達と喧嘩したについて、8名が選択した（Appendix：質問6-2）。**

まず保育者は、喧嘩した子どもたちの双方の意見を聞き、中立的な立場で仲介する。お互いに自分の気持ちを伝え合わせることで、相互理解を促す。喧嘩の原因となった感情や気持ちを共有し、互いの気持ちを認め、受け入れることを促す。特に言葉で表現することが難しい幼児に対しては、どこが嫌だったのか、どうして欲しかったのかを聞くことで、自分の気持ちをうまく伝えられるように支援する。これらの対応は、仲間外れへの対応と同様に、まずは子どもが自分の気持ちを受け止めてもらえることが一番重要であるという認識から、どの保育者も共通して行っていた。

喧嘩の問題解決は、当事者だけでなく、クラス全体の学びにもつながるため、サークルタイムなどを利用して、クラスに出来事を伝え、他の友達と意見を述べ合う機会を設けるといった回答もあった。

また、年長に上がるにつれ、保育者は、基本的に子どもたちが自分たちで喧嘩を解決するように促すという見解もみられた。子どもたちが主体的に自分の意見を言うこと、折り合いをつける力を育てることを狙いとしている。必要に応じて保育者が仲介に入るが、子どもが成長できるような関わり方を心がけている。

仲間はずれのケースと同様に、喧嘩が解決しない場合でも無理に一緒にいる必要はなく、子ども自身が自分の感情に従い、自身で選択しても大丈夫だということ、友達との関係において自分を尊重することの大切さも伝えるとの言及があった。

## **3) 親しい周囲の人（大好きな先生や仲良しの友達など）が引っ越していなくなってしまったについて、3名が選択した（Appendix：質問6-3）。**

まず保育者として、子どもたちが抱える悲しい気持ちや寂しさに寄り添い、話をじっくり聞くことで、子どもたちが自分の感情を受け止めるよう促す。引っ越した友達や先生に手紙を送るなど、繋がりを持ち続ける方法を子どもたちに提案し、離れていても関係を続けていくことができることを伝える。「また会える日がある」というような前向きな言葉をかけることで、子どもたちに希望をもたせ、現状を乗り越えるような試みを行う。特に悲しい感情を上手く言語化できなかつたり表現できなかつたりする子どもの場合、集団で「皆でどうしてあげたらいいか」と話し合い、新たな友達との仲間意識をもち、一緒に悲しみを乗り越えられるような体制を整える。時には、「あの子は今、何をしているかな」というような会話を通じて、一緒に思い出を振り返り、楽しかったことを共有する。子どもたちがポジティブな思い出を大切に、感情に共感を示すことを通じて悲しみを乗り越えるよう支援する。

以上のように保育者は子どもたちが親しい人との別れを乗り越えるために、まずは感情の受け止め、繋がりが継続している意識への支援、ポジティブな思い出の共有、集団でのサポートなどを重視している様子がみられた。

## **4) 家庭内で辛いこと（親に叱られた、親同士の喧嘩、家庭内の雰囲気良くないなど）があったについて、5名が選択した（Appendix：質問6-4）。**

保育者は、まず子どもが感じていることを聞き、理解しようとし、どのような状況であっても、子どもを責めることなく、保育者が子どもの味方であることを伝え、安心感を与える。家庭内での愛情の欠如や保護者の忙しさによって生じる出来事であれば、必要に応じて保護者に事情を聞き、保護者のサポート

も視野に入れる。きょうだい喧嘩などの状況であれば、共感を示し、子どもが自分の感情を整理し、落ち着けるよう支援する。

以上のように、保育者としての関わり方は、子どもが家庭内で経験する辛いことを乗り越えるために、感情の受け止め、保護者との連携、共感とサポート、安心できる環境の提供に焦点を当てている。

**質問7：子どもたちのレジリエンスの到達状況をどのように測定／評価／判断されますか？（可能な方のみご回答ください）**については、以下の回答があった（Appendix：質問7）。

まず、全員が特にアセスメントツールがあるわけではないと回答した。

レジリエンスの到達状況については、子どもたちがどれだけ早く気持ちを切り替えることができるかを観察して判断するとの言及があった。挑戦に失敗した際、素早く立ち直れるかどうかはレジリエンスの指標の1つとして捉えられる。また、意見を言えなかった子が言えるようになったり、一人で遊んでいた子が友達と遊ぶようになるなどの変化も成長と捉えていた。

次に、評価していく方法として、日々の記録や学年末の指導記録をもとに、子どもの成長や目標の達成状況を確認することが挙げられた。子ども自身の過去の行動と現在を比較し、成長や変化を確認する。一人の保育者の判断だけでなく、職員間で情報共有をし、多様な視点で子どもを観察することにも言及があった。

これらの評価を子どもに示すことはないが、子どもたちの個々の成長を確認しながら、日々直面する困難や挑戦に対峙する子どもを支援していくことの重要性が指摘された。

**質問8：子どものレジリエンス到達状況について、保護者にフィードバックをされますか？（可能な方のみご回答ください）**については、以下の回答があった（Appendix：質問8）。

まず、子どもの日常の小さな成功や挑戦を克服した点に焦点を当て、保護者に伝えることを大切にしている様子が伺えた。子どもが友達とうまく関われるようになったり、感情を適切に伝えられるようになったりなど、具体的なエピソードを保護者に報告する。さらに、子どもが何か新しいことをできるようになったり、苦手だったことを克服したりしたときに、子どもの前で具体的に伝えることで、子どもの自己肯定感を高める配慮をしているとのことであった。

その他、個人懇談や学年全体の懇談会を通じて、子どもの具体的な姿や資質・能力について保護者に伝える場合もあるとのことであった。子どものレジリエンスを育てるためには、保護者の理解と支援が重要であると考え、状況を詳しく伝えながら、家庭での支援も促すとの言及もあった。

以上のように、保育者は子どものレジリエンスの成長を保護者にフィードバックしながら、ともに喜ぶとともに、家庭での保護者からの支援を促す様子も伺えた。

**【佐藤朝美】**

#### **第4章 予備調査・主調査の考察とSELの観点による保育方針の再考**

予備調査では、「社会情動的スキル（非認知スキル）」や「レジリエンス」の学術用語についての認知度は低いものの、保育者たちは実際にこれらを大切に、育むよう実践しているのではないかという見解が、教頭や主任保育者など園のリーダーたちから得られた。その結果を踏まえ、現場の保育者を対象とし

た主調査のインタビューでは、インタビューの途中で用語への認識を一致させるフェーズを設け、日常の保育現場で起こる具体的な状況や子どもたちとの関わり方を例に出し、それらに答えてもらう項目を設けた。

主調査では、保育者の「社会情動的スキル（非認知スキル）」の認知度は研修での学びを通して高かったものの、「レジリエンス」については、用語の認知度は低かった。ただし、「レジリエンス」の用語の意味を伝え、保育者が共通して、日々の保育の中でとても大切にしていることであると認識していた。多くの保育者は、プログラムや教材を介してではなく、子どもが日々の生活で遭遇する挑戦や友達、仲間とのいざこざを通じて、レジリエンスを育てていると述べていた。共通する回答として、子どもの気持ちを保育者が受け止めることの重要性が強調されていた。また、自分の気持ちを表現できるように支援し、相手の気持ちを理解することも、重要な支援として挙げられていた。さらに、子どもたちの異なる考えを尊重し、その場で即座に解決するのではなく、折り合いをつける方法を保育者と共に模索すること、成長に伴い、子どもたちが自身で問題解決するよう図ったり、折り合いをつけたりすることを目指している様子が伺えた。新しいことへの挑戦に対しては、小さなステップで徐々に成功体験を積むことが、あきらめない気持ちや見通しを持つことと考え、保育者が意識している様子が伺えた。加えて、友達と教え合ったり、友達を見て学んだり、友達の頑張っている様子から励まされたりすることなど、友達の存在自体も大きな支えとして挙げられていた。保育の中で、子どもたちが直面する困難や葛藤を避けるのではなく、ストレスを感じながらも自分たちなりの対処方法を見つけていくことを重視していた。これには、子どもの気質や発達段階、子どもたちの人間関係を踏まえた保育者の専門的な対応が必要であると考える。

主調査のインタビュー全体を通して、「レジリエンス」という困難や葛藤状況を解決するために、保育者の考えの背景に「社会情動的スキル」を育もうとしている言及が多く見られた。そこで、社会情動的スキルに対する支援に対する言及をソーシャル・エモーショナル・ラーニング（Social and Emotional Learning：以下 SEL）の観点から整理を行う。

SELは、社会性と情動の学習、社会性と感情の学習、社会性・情動学習、社会性・感情学習とも呼ばれている（渡辺・小泉, 2022）。「すべての子どもや大人が、健康なアイデンティティを発達させること、情動（感情）をコントロールして個人や集団の目標を達成すること、他者への思いやりを持ち、それを表すこと、支持的な関係をつくりそれを維持すること、そして責任と思いやりのある決定ができるように、知識とスキルと態度を身につけて使えるようになる過程」（The Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning：CASEL）、まとめると「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性（対人関係）に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」と説明されている（図1）。

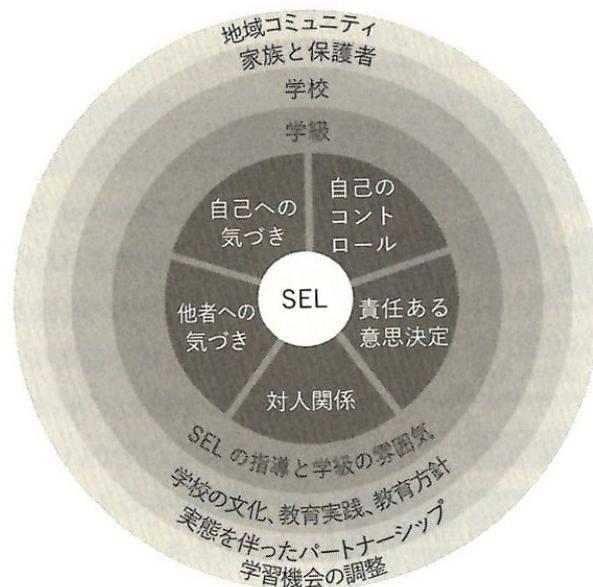


図1 SELで育成を目指す能力と環境の関係（「キャセルの輪」）  
 (CASEL, n.d.a)

出典：渡辺弥生, 小泉令三(2022), p.9.

**SEL**で育くもうとしているスキルとして、以下の5つの項目が含まれている（表4-1）。SELプログラムで育成する能力は、幼稚園教育要領（文部科学省, 2017）における5つの領域のうち、「環境」領域を除いた「健康」「人間関係」「言葉」「表現」の各領域と深く関連しているとされている（渡辺・小泉, 2022）。

- ① 自分を理解するスキル（self-awareness）
- ② 自分をコントロールするスキル（self-management）
- ③ 他者を理解するスキル（social awareness）
- ④ 関係性を築くスキル（relationship skills）
- ⑤ 責任を持って意思決定するスキル（responsible decision-making）

表4-1 SEL コンピテンシーの説明と具体例（渡辺・小泉（2022）より筆者作成）

能力	説明
① 自分を理解するスキル (self-awareness)	自分の感情（情動）や思考や価値観と、それらが状況全般における行動にどのように影響を及ぼすのかを理解する能力。これには、十分に根拠のある自信と目標のもと、自分の長所と限界を認識する能力を含む。
② 自分をコントロールする スキル (self-management)	様々な状況で自分の感情（情動）、思考、行動を効果的に調整する能力。これには、個人および集団の目標達成のための満足遅延、ストレス管理、そしてモチベーションとエージェンシーを感じる力を含む。
③ 他者を理解するスキル (social awareness)	多様な背景や文化や文脈を持つ者を含めて、他者の視点を理解し、共感する能力。これには、他者への思いやりをもち、様々な状況での行動に関するより広範な歴史的および社会的規範を理解し、家族、学校、および地域コミュニティのリソースとサポートを認識する能力を含む。
④ 関係性を築くスキル (relationship skills)	健全で協力的な関係を確立および維持し、多様な個人やグループごとの設定を効果的に導く能力。これには、明確にコミュニケーションを行い、積極的に耳を傾け協力し、問題解決と建設的

	な紛争の交渉のために協力して作業し、異なる社会的および文化的な要求と機械を伴った状況をナビゲートし、リーダーシップを発揮し、必要に応じて助けを求めたり提供したりする能力を含む。
⑤ 責任を持って意思決定するスキル (responsible decision-making)	様々な状況での個人的行動や社会的相互作用について、思いやりのある建設的な選択をする能力。これには、倫理基準と安全上の概念を考慮し、個人的、社会的、および集団のウェルビーイングのための様々な行動による利益と結果を評価する能力を含む。

主調査でのインタビュー発話を全てテキストデータ化した記録をもとに、NVivo を用いて分析を行った。また、インタビューの対象者の属性のうち、担当学年（年中4名、年長5名）と勤務年数（10年未満4名、10年以上7名）で分類した。対象者の発話におけるSELの5項目の出現頻度は以下の通りである。

表 4-2 SEL に関する対話の出現頻度

能力	出現頻度合計	担当学年別平均		勤務年数別平均	
		年中	年長	未満	以上
① 自分を理解するスキル (self-awareness)	45	3.8	4.3	3.5	4.8
② 自分をコントロールするスキル (self-management)	74	6.5	6.9	4.8	9.0
③ 他者を理解するスキル (social awareness)	42	4.5	3.4	3.3	4.4
④ 関係性を築くスキル (relationship skills)	26	3.0	2.0	2.2	2.6
⑤ 責任を持って意思決定するスキル (responsible decision-making)	26	2	2.6	1.8	3.0

以下に具体的な内容について述べる。

- ① 自分を理解するスキル (self-awareness) については、子どもが自分の状態を認識することと自分の感情をどのように表現するか？ に関するプロセスに対し、保育者は重点を置いていた。例えば、「自分が思ってたのとできる実力っていうのが違うとか、それがちょっと自分の中でショックだったとか、そういうのは結構困難なのかなって」／回答者 (E)」と述べていた。保育者の多くが、制作や身体的活動において、子どもたちが実際にできることと自分が思っていた能力とのギャップに直面し、集団の中での自己の立ち位置や苦手さを実感する瞬間に、自己認識が促されることを言及している。

この過程では、自分の感情や苦手なことを受け入れると同時に、他者に伝えることも重要である。例えば、「やっぱり自分でしっかり意見を言うというか、自分が思ったことを自分から発信していくってことは大事かなって捉えてまして」／回答者 (I)」と述べていた。子どもたちが自己の意見や感情を適切に表現し、困難や逆境を乗り越える力を育むための教育課程や活動が行われていることが述べられていた。

自分を理解するスキルについては、学年担当が年中より年長の保育者の方が、さらには勤務年数が10年未満より10年以上の保育者の方が、子どもが自分自身をより深く理解し、他者に伝えていくことが不可欠なスキルとしての言及が若干多くみられた。

- ② 自分をコントロールするスキル (self-management) については、子どもたちが自己抑制だけでなく、感情をコントロールすることを学ぶ過程にも重点を置いていた。例えば、「うまくいかなかってっていう時でもそれを乗り越えて、何とか折り合いを付けてまた挑戦していく力、粘り強さって

言うんですかね、そんなものも育てていく必要がある…/回答者 (G)」と述べていた。これには、自信を持つこと、落ち着きを見つけるためのアイテムや環境の利用、友達との折り合いをつける能力、自己肯定感の向上、感情の表現方法の学習が含まれる。例えば、「成功体験をいっぱいさせることによってうまく対応していけるように、自分に自信が付くようになっていくという感じです/回答者 (E)」と述べていた。同様に、保護者の声掛けや友達の存在も重要であるとの意識があった（「保育士の声掛け一つでも変わってくると思います…/回答者 (N)」「友達の影響ってすごい大きいんだなと思って。周りの子が頑張ってる姿とか、陰で誰か教えてくれたりとかで立ち直るといふか、そこから自分の気持ちをだんだん切り替えられるようになっていくのかなと思います。/回答者 (N)」)。

また、失敗や困難から立ち直る力、粘り強さ、協同する力、意欲を持って挑戦する姿勢なども重要な要素として挙げられている。これらは、集団で友達との関わりが影響するとの言及もあった（「うまくいかなかった時に、担任が言うのは簡単なんですけど、そうじゃなくって、自分たちで気づいて、自分たちで、もっとよくするためにどうしていくかって考えるところをすごく大事にはして/回答者 (K)」。自分の感情を適切に管理し、社会的な状況に適応できる能力を育むための具体的な活動や教育的な考えが示されていた（「特に小学校行ったら集団活動の中で担任は1人で、かつ時間割があって自分たちで見ながら行動したりとか、それが将来の生活につながってきたりとかもあるんで、今どんなにこっちが手を差し伸べていろいろやってあげても、結局小学校行った時にできなかつたらそれは意味がないと思うので、今のうちに自分で考えたり、自分で動いたり、何か困った時に誰かに助けを求めたりとか、そういう力っていうのは絶対今必要だと思ってる/回答者 (I)」)。

これらのスキルは年齢による発達があるという言及もあった（「立ち直るっていう意味では、例えば何か失敗した時に、駄目だったなってずっと自分の中でなかなか切り替えられなかったりとか、できなかったことを他の人のせいにしたりとか、怒って怒りぶつけるとか、そういう場面はたくさんあるんですけど、でも時間がたつにつれて自分の中で切り替えるっていうことは、すごい5歳時の後半ぐらいになってくるといろんな子に見られるなっていうのは思ってた/回答者 (G)」、「大人がフィードバックをするだけで、子どもたちは、もう十分、それですっきりするような関係になってきてるので、その面では、年中の最初の積み重ねから、育ってきてるなというふうには感じてます。/回答者 (K)」

自分をコントロールするスキルについては、勤務年数が10年未満より10年以上の保育者の言及が多かった。経験豊富な保育者は、子どもたちが直面する様々な感情や困難に対処する方法、自信の構築、失敗からの回復、持続的な挑戦への意欲など、具体的な事例や状況を経てこれらのスキルを育むための戦略や介入を学んでいるものと考えられる。

- ③ 他者を理解するスキル (social awareness) については、子どもたちが相互理解と共感する態度や気持ちを育てている様子が示された。相手の気持ちを理解すること、衝突時にお互いの意見を尊重し合うこと、そして解決に向けた対話をするを重視している。例えば、「お互いの思いを受け入れてもらえたことで、ちょっと消化できるのも、気持ちもあるのかなと思うんで、それは日々心掛けて…/回答者 (J)」と述べていた。具体的には、友達との衝突を解決するために、相手の立場に

立って考え、お互いの感情や意見を共有し理解し合うプロセスが強調されている（「相手の思いに気づかなくて、けんかすることが多いので、自分の思い込みだったりとか、両者が聞いてくれなくて、…互いの思いが分かり合えるように橋渡ししていくってということも必要かなっていうふうに…関わっていくかなって…思います。／回答者（L）」）。この過程では、子どもたちが自分の感情を適切に表現し、相手の感情を尊重することで、互いの関係を強化し、社会的な調和を促進することが目指されている。

他者を理解するスキルについては、担当学年が年中児の保育者の方が年長児より若干言及が多かった。例えば年齢による言及では、年中児担当の保育者は「ここでだいぶみんな周りが見えてきたというか、相手にも気持ちがあるっていうことに気付き始めて、なので、そういう対応の仕方ができるようになってきた／回答者（E）」や「ゴールイメージとしては、5歳児のその姿なのかなっていうふうには思っていました。5歳になった時に、…自分たちで課題を乗り越えたりとか、友達と一緒に乗り越えていくために、今4歳のこの時期に、お友達と一緒に自分たちで何かを生み出すことの楽しさを感じてもらえたらいいなっていうふうには思っています。／回答者（K）」と言及し、年長児担当の保育者は「みんながいる場所でお互いの気持ちをもう一回ちゃんと言葉で伝え、5歳なのでもう言葉で自分の気持ちを話せるので…／回答者（H）」と言及していた。他者を理解するスキルの習得については、年中児の方が課題となっている様子がうかがわれる。

- ④ 関係性を築くスキル（relationship skills）については、子どもたちが友達との関係を築く上で重要なコミュニケーション能力や、衝突後の解決策を見つける能力を学ぶ過程を示している（「いつも悪いことをしてしまうっていうふうに思ってる子でも、いいところがあるってというのは他の子も知ってほしいなと思って関わるように意識しています。／回答者（J）」、「あの子と一緒に遊びたいって思ってるのに（遊んでももらえない）時に、どうするか。…一緒に遊びたいから、自分のしたいことを我慢してでも、その子のそばに行くのか、…ちょっと距離を…取るのか。…そういう人間関係の距離の取り方というか、…そこを乗り越える…初めの集団…、幼稚園がそういう場なのかなって…」）。けんかをして仲直りすることの重要性、相手の気持ちを理解し共感する力、自分の感情を適切に伝える方法、協力して問題を解決する力が強調されている。例えば、「決してけんかが悪いわけじゃないから、けんかはどんどんしなさいって。ただ、仲直りはちゃんとしようって話しています／回答者（E）」と述べられていた。また、自分の意見を言いつつも他者の意見を尊重する態度、困難を乗り越えるための周りのサポートの価値、そして自分と他者との間に建設的な関係を築くための自立した努力を育くもうとしていた。例えば、「一緒にまた違う時に遊びたかったらその子にどう声を掛けてあげたらいいかなとか、解決の方法をクラス全員で挙げるようにはしていますね。／回答者（F）」、「クラス全体でも、話、こういうことがあったっていうのは話して、それぞれの頑張ってごめんねが言えたとか、嫌だった気持ちを相手に伝えれたんだよみたいなことはクラスみんなが共有して。／回答者（J）」、「ちょっと全く関係のない子たちに振っていくことで、その子が、そうやって言われたら、怒る気持ちも分かるとか、ちょっとうまいこと自分の気持ちを言ってくれて。／回答者（K）」と述べていた。これらはすべて、子どもたちが社会的スキルを発展させる上で基礎となる要素であり、彼らが将来、健全な人間関係を築いていく上での土台となるという保育者の認識がうかがわれた（「人とやっぱりコミュニケーション取っていく力って

というのは、どうしてもこれからの社会とか、その子どもたちが、小・中・高・大学生・大人っていうふうになっていった時に、もう絶対に必要な力かなっていうふうに思うので。／回答者 (L)」。)

これらの育成には時間がかかるという言及もあった（「結構子どもたちの中で折り合いを付けていけるといふか。でも、急にしろって言っても無理なんです。それをほんとに繰り返し伝えていく感じ／回答者 (E)」。年長児では、いざこざを全体で共有し考える機会としていた。

人間関係を築くスキルについては、担当学年が年中児の保育者の方が年長児より若干言及が多かった。年中児担当では、「5歳になった時に、…自分たちで課題を乗り越えたりとか、友達と一緒に乗り越えていくために、今4歳のこの時期に、お友達と一緒に自分たちで何かを生み出すことの楽しさを感じてもらえたらいいなっていうふうには思っています。／回答者 (K)」。年長児担当では、「子ども同士でも、今じゃあ遊べへんやったら、じゃああとは夕方また遊ぼうとか。そういう、ちょっといつもと違う切り替えじゃないですけど、今までだったら…けんかになってたのが、ちょっとずつ子ども同士でも話が、やりとりができるようになってきた…。／回答者 (O)」。などがあつた。学年を経るにつれ、徐々に育っている様子が見えてくる。

- ⑤ 責任を持って意思決定するスキル (responsible decision-making) については、子どもたちが主体的に自分で決定していくこと、自分や他人の選択を尊重することを育成していることが示された。例えば、「まずは自分、自己決定していくっていうことであつたりとか、自分の主体性とか意欲関心の部分で興味をもっていろんなものに関わっていくって、幼児教育の基本的な部分の力はまず第一に育てていく必要があるだろうなってことを思っています。／回答者 (G)」と述べられていた。このスキルは、困難に直面した際の粘り強さ、自分の感情や意見を適切に表現し、状況に応じて柔軟に対応する能力と関連しているとの見解であつた（「うまくいかなかったっていう時でもそれを乗り越えて、何とか折り合いを付けてまた挑戦していく力、粘り強さって言うんですかね、そんなものも育てていく必要がある／回答者 (G)」。)

また、子どもたちが自分の行動に責任をもち、適切な選択をすること、そしてその結果を受け入れることを学んでいるということへの言及がみられた（「なんか駄目だつたなって思うことがあつたら、その場は反省してあとは切り替えるとか、他の子がそういうことあつた時に声掛けてあげたりとか、逆に注意してあげたりとか…／回答者 (I)」、「自分がやるって言ったことに対して責任を持って最後までするっていうのは、自分が発信するっていうところにもつながってくると思います／回答者 (I)」。)

さらに、集団内での調和や共同作業を重視し、個人の目標達成と集団の目標達成のバランスを取ることの重要性が強調されていた（「今は、この子たちと遊びたくて仲間外れにされた子とは今遊びたくなかった」っていうんだつたら、「じゃあ逆の立場になった時に同じ悲しい気持ちするけど…いいっていうこと？」…と聞いて…「こういう理由があつて今はこのメンバーでいたいんだ」って言うんだつたら、それを仲間外れされた子に…「あなたが嫌いであつたからじゃなくて、こういう理由があつて今こうなってるんだよ」っていうことを伝えたら、その子は割と納得したりとかしますし。／回答者 (I)」、「でも、だつたら無理して一緒にいることはないんじゃない？って。自分でも何か別にその子と絶対いなきゃいけないわけじゃないんだから、仲良くしたいとかこれからも一緒に遊んでいきたいんだつたらそういうところを少しずつ受け入れてあげることが大事だ

よって。だけど、それがどうしても嫌だっというんだったら、離れていっても別にいいんだよって  
いうことは伝えてます/回答者 (E)]]。)

責任をもって意思決定するスキルについては、学年担当が年中より年長の保育者の方が、さらには勤務年数が10年未満より10年以上の保育者の方が若干多く言及していた。このスキルは、子どもの年齢が上がるにつれ、特に小学校に入学以降に求められる重要なスキルであることから、言及が増えたものとする。また、勤務年数が長い保育者は、子どもたちが直面する様々な状況に対して豊富な経験をもっており、子どもたちの責任や意思決定に関する深い洞察があることも想定される。

主調査でインタビューを行った保育者の園では、SELプログラムの実践を行っていたわけではないが、「レジリエンス」を育むための支援として、子どもたちの自己認識、自己管理、他者理解、関係性構築、責任ある意思決定といった社会的・感情的スキルの育成に焦点が当てられている様子がみられた。自分を理解するスキルでは、保育者は子どもが自身の能力や感情を認識し、表現することの重要性を強調し、実践的な活動を通じてこれらのスキルを支援していた。自分をコントロールするスキルでは、自己抑制や感情の管理、挑戦への意欲などを重視していた。さらに、他者を理解する能力では、共感や対話を通じた相互理解の促進が挙げられていた。関係性を築くスキルでは、コミュニケーション能力や衝突解決のための対応を重視し、責任ある意思決定においては、子ども自身が情報を基に判断し、選択の結果を受け入れる力を育くもうとしていることを言及していた。これらのスキルは、保育において「レジリエンス」を育むための必要な要素として捉えているだけでなく、子どもたちが社会の一員として健全に成長するための基礎を形成するために重要であることも触れられていた。ただし、保育者の経験や子どもたちの年齢に応じて異なるアプローチが取られていることも示されており、今後の課題としては、「社会情動的スキル (非認知スキル)」や「レジリエンス」を育む保育への取り組みを深めるための知見をまとめていくことが挙げられる。

#### <参考文献>

渡辺弥生, & 小泉令三. (2022). ソーシャル・エモーショナル・ラーニング (SEL): 非認知能力を育てる教育フレームワーク. 福村出版

【佐藤朝美】

## 第5章 指定討論「長期的な展望からみた幼児期のレジリエンスの問題」

ここでのテーマは、幼児期の低いレジリエンスは学童期の困難の素地となる可能性があるかどうか、である。

主調査のインタビューから、教師たちは、困難に直面した子どもに対して、状況を打開し園生活の適応を促すだけでなく、子どもの「自己 (self)」の発達を援助することが大切だと考えていることが明らかになった。たとえば、ある教師は、高いレジリエンスをもつ条件として、自己の尊重、困難な状況と折り合いをつける粘り強さ、気持ちを切り替える楽観性、を挙げている。

そこで、「自己意識」、「自己信頼感」の観点から、レジリエンスの問題を学童期との関連で検討するが、ここで「原因帰属」(causal attribution) の概念をキーワードとして取り上げる。「原因帰属」は、成功体験や失敗体験をしたときにその原因を何に求めるか、ということだが、レジリエンスとの関連で失敗体験の場合を考える。失敗の原因を、自分に求める場合もあれば、外部(他者、場面他)に求める場合もある。レジリエンスの低い子は、「自分が悪いからできなかった」と原因を自分に求めがちである。反対に、「悪いのは〇〇くんだよ」のように外部に求める子は、レジリエンスが高いとは限らないがストレスはあまりもたない。また困難状況を克服するために何が必要かについても、自分の内部(自分の努力)と考える場合もあれば、外部(他者や状況)に求める場合もある。前者は「努力すればできるようになる」という考え方であり、教師の側についていえば、「がんばろうね」という形の励ましや支援の仕方である。ちなみにアメリカとの比較研究では、日本では「自分の努力が足らなかったのが原因なのでもっと努力しよう」という自己内部の原因帰属が強い傾向が明らかになっている。

幼児期では、原因帰属を自己内部に求めることは、「自己」の概念が未発達な年少児ほど少ないのだが、年長児になるほど多くなる。日本の幼児教育は原則として遊びが中心であり個人の評価が行われず、また教師も、インタビューの発言のように、しなやかに切り替えるのを支援している。しかし、低いレジリエンスの経験を積み重ねてしまった子どもは、「ダメなのは自分のせいだ」と考えてしばしばうまく切り抜けることができない。

学校生活は、幼児教育よりはるかに多くの制約がある。学習の面だけでなく、たとえば、黒板の字を写す速さ、授業のリズムに乗ること、時間割にしたがって切り替えること、などは、幼児教育では経験しないか重視されてきていない。たくさんの新しい経験を前にして、幼児期に低いレジリエンスを積み重ねてきた子どもは、困難にぶつかったときに、「何をしても自分はうまくいかない」という学習性無力感(learned helplessness)と低い自己効力感にとらわれがちである。失敗するかもしれないことは初めからやらない、学習意欲も学校生活に適応する意欲もない、友達とぶつかるよりは引いて関わらないようにする、ということが起こりうる。低学年からのこのような意欲の低さはしばしば、乳幼児期からの経験の積み重ねの結果なのである。したがってもっている能力を発揮できないアンダー・アチーバー(under achiever)になる可能性がある。中高学年にメタ認知(metacognition)が獲得されると、「自分はどうせだめな人間だ」という自己認識をもつようになってしまう。そこから自己信頼感を取り戻す指導は、学校の教師にはとても厳しいことである。

では学童期まで見通したうえでの幼児期の教師の支援で大事なことは何だろうか。

インタビューでの教師の発言にあるように、困難をうまく切り抜けられなかった子ども、あるいはトラブルを何度も繰り返す子どもに対しても、教師が子どもの試みに敬意を払い、受容的な支援をすること、たとえできない自分も大切な自分なのだと伝えることを通して、自己信頼感をもつような働きかけは、

学童期を乗り切るために重要である。またある教師がインタビューで語ったことも注目される。困難に直面したときに、大人がすぐ援助の介入をするのではなく、うまく行かないこともあえて経験することで、子どもたち自身が一緒に協働で乗り越えるような場を創る。5歳児たちは一緒に問題解決を考えることができるが、そのためには、4歳クラスの時に友達と協同生活をする楽しさを知っていることが大切、だというのである。自己信頼感と同時に、協同生活でのよい関係のなかで他者への信頼感を育てることが、長期にわたる高いレジリエンスの基盤の一つとなる、ということである。

本研究の発端は、コロナ禍でのレジリエンスの問題が幼児教育で実際にどう支援されているかを追求することだった。子どもはコロナ下で心理的な不安定、運動不足、コミュニケーションの機会の不足などさまざまな変化を経験している。これらは幼児期には比較的目立たなくても、学校生活でより大きな問題を起こしているようである。たとえば、心理的な不安定は集中力の低下や学校生活への適応の不全感を、運動不足は運動能力の低下と不器用さを、コミュニケーションの機会の不足は自己表現の拙さと子ども同士のトラブルを起こしがちである。コロナの影響でいえば、レジリエンスの問題は、幼児期には比較的潜在していたとしても学童期で顕在化しているのではないだろうか。

**【星三和子】**

## Appendix)

### 質問1：「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？に対する回答

回答者 (E) テストで測る認知能力以外の能力である非認知能力とほぼ一緒の意味と解釈している。

目に見えない部分だけとても大事なことだと考える。

回答者 (G) <とらえ>

非認知的能力。自園では独自の資質能力観点をもっている。その中の「自分の生き方」「人とのつながり」の2つに該当する。意欲、自分のしたいことに突き進む力。人と共同していくための伝える力。自分の気持ちをコントロールしつつ人と共同する力。

<どのような社会情動的スキルが大事か>

人格形成の基礎の部分に当てはまる。知識技能以外の部分が社会情動的スキルに当てはまる。加えて思考力、判断力も含まれてくる。幼児教育の中ではとても広い範囲を指す。自己決定、主体性、意欲関心の部分の力を、まず大事に育てる必要がある。それらが後押しするかたちで人と共同しつつ自分の目的に向かっていくし、共通の目的にも向かっていく。共同するためには自分の思いをコントロールする必要があるし、うまくいかないときには乗り越えて折り合いをつけること、粘り強さも大事。

<社会情動的スキルが高い子どもとは？>

上記に加えて、目標に向かっていく過程で試行錯誤する力も含まれる。

<育むことは大事か？>

もともと大事なこと。

回答者 (H) 子ども自身は身に付けたいとは思っていないが、幼稚園という社会の中でコミュニケーションを取っていく方法であったりとか、友達と関わっていくための方法であったりとかっていうところの力が育っていく力。園という社会の中で生き抜いていくためのコミュニケーションスキルであったり、友達とのやりとり、他者理解みたいなどころのスキル。

いろんなもの（友達や事）に対応できていくお子さんはスキルが高いと考える。

回答者 (I) <とらえ>

非認知能力。目に見えるものではない。人間関係、相手の気持ちを理解する力、自分のやりたいことに集中して取り組む、最後まで責任をもつ。学力など目に見えて分かる力ではなく、その人自身がこれからどう生きていくかを考えたり、考えた上で行動したりするために必要な力。

<どのような社会情動的スキルが大事か>

自分でしっかり意見を言うこと。自分が思ったことを自分から発信していくこと。サークルタイムで発表する機会をつくったり、トラブルがあったときに自分で解決できるように声かけしたり見守ったりしている。

<社会情動的スキルが高い子どもとは？>

自分の意見をしっかり言う＋一歩引いて相手の立場を考える。自分の意見がどうしたらうまく伝わるかを切り替えることができる。責任をもって最後までやる。

<育むことは大事か？>

大事。この時期にこそ培える部分。

回答者 (K) ・問題が起きた時に、子どもたちが自ら策を考え、困難や課題を乗り越える力を社会情動的スキルと捉えている

- ・また、ゼロから新しいものを創造する能力も、このスキルの一部ととらえている
- ・園の教育理念と重なる部分があり、大事だと考えている

(スキルが高い子どもの特徴)

- ・自発的に難しいことに挑戦する意欲を持つ。
- ・コミュニケーション能力が高く、友達との関わりを楽しむ。
- ・困難な状況でも前向きな感情で対応する。

回答者 (L) 非認知的能力と研修では学んでいた。

我慢強さ、やる気をもってやり抜く力、思いやり、自分に負荷が起きた時に我慢強さ、自分で乗り越えようとする力。

●今のクラスの子も達は難しいことに直面した時にすぐに諦めてしまう姿があるーコマ回しー1学期とは違うのは、友達同士でやろうとする成長が見られている。友達の困りを察して助ける力。人とコミュニケーションを取っていく力は絶対に大切な力が重要だと思う。

<スキルが高い子とは>友達が困っていたら、友達の気持ちに寄り添った行動ができる子どももいる。自信をもつ、自尊心があることは基盤になっていくと思う。

●研修等で、社会が大きく変化していく時代で、重要だと思う。様々なことにチャレンジして欲しいと思う。

回答者 (M) <とらえ>

目標(～したい)が難しくても、そこに向かって自分なりに考え、試行錯誤し、目標達成する力。友達と協力する、協同性。

<どのような社会情動的スキルが大事か>

安心感や安定が根本にあっての話だが、安定して過ごせる場所であれば、その中で自分の力を発揮しようとする意欲。将来クリエイティブな職業が求められてくる。自由に発想したり、自分なりに表現したりすること。

○幼稚園は土地柄なのか、教育熱心な保護者が多く、子どもを大事に思うが故に失敗しないようにおうちの方が準備される地域であると感じる。大人や保護者、先生に言われないとできない、失敗したらどうしよう、ではなく、失敗しても大丈夫、間違ってもカッコ悪くないと考える集団になってほしい。

<社会情動的スキルが高い子どもとは？>

自分のすることに自信があっても、間違っても、それがうまくいかなくても、うまくいっても、大丈夫と思える。やってみようという意欲が高い。周りの友達のしていることから刺激を受けながら、周りとの関係性をつくることができる。うまく助けを求めたり、子どもたち同士で相談し、自分の思っていたこととは違う方向に物事が進んでも対応できる、柔軟な子ども。

<育むことは大事か？>

これからのこと、将来のことも考えて、大事だと思う。

回答者 (N) ・認知能力は理解などの面に関係するが、社会情動的スキルは非認知能力に属し、目に見えにくいのが子どもの心の中の能力と捉えている。

・子どもたちが自身で考え、行動できるようになるために重要なスキル。

・社会情動的スキルを育むために、子どもたちが自ら話すことができるように、見守る姿勢を心掛けている。

(社会情動的スキルが高い子どもの特徴)

・自分自身で考え、友達のことも考慮して意見を伝えることができる

回答者 (O) <とらえ>

非認知能力ということばを最近よく聞く。どういう意味なのか、自分なりに調べた。挑戦する力、協調性、創造性、好奇心、子どもの成長のうち目に見えない部分。

<どのような社会情動的スキルが大事か>

大人に察してもらおうとしている子どもが多いと感じる。たとえばお茶をこぼしたとき、「お茶」「お茶こぼれた」とだけ言う。その先に自分でどうしたらいいのかを考えて、自分で言ってきてほしいと思う。子どもが自分で考えて行動できる力をつけてあげたい。自分の思いをことばにして伝えられる力。周りの状況を見て、ときには我慢する力。友達の意見を聞く力。

<社会情動的スキルが高い子どもとは？>

集団の場で合わすこともできるけど、自分で考えて制作したり、話し合いの場で色々な提案を出したり、話を聞いたりできる子ども。

<育むことは大事か？>

大事だと思う。のちのち大人になって、大きな集団社会の中で働いたり生活していく上で、人とのかかわりはとても大切。いまも保育所の中で、子どもの小さな集団で生活しているが、友達とのかかわり、自分で考えて行動する力はのちのち社会に出ても役立つ力だと思うので。

## 質問2：「レジリエンス」ということばを知っていますか？に

### 回答者 (G) <とらえ>

初めて見聞きしたときの理解は、何かうまくいかなかったとき、困難にぶち当たったとき、はねあがってくる、困難を乗り越える力。それをきっかけに調べたら、もう少し広い意味があると知った。自分が尊重されているのか。社会情動的スキルに含まれている要素もレジリエンスと言われると知った。この2つの違いがどこら辺にあるのか、理解が難しくなってくる。調べるほど違いがあいまいになってくる感覚がある。楽観性も含まれてくることばかと思う。

### <レジリエンスのある子どもとは？>

うまくいなくても気持ちを切り替えて再度挑戦していける、粘り強さのあるのがレジリエンスのある子。なぜかという、自分自身が受け入れられている、尊重されているという部分があるから。なので広い意味合いになってくる。

回答者 (H)・レジリエンスは、困難な状況に直面した際に、どのように行動すべきか、どのようにその状況を切り抜けるべきかについての力だと理解している。

- ・子どもたちが挑戦して失敗する場面で、諦めずに何度もトライする力、また友達の行動から学んでみること
- ・社会において、自分の思い通りにいかない状況が多いため、困難な状況でどのように行動するかを学ぶことは、子どもたちにとって重要であると考えている

回答者 (L) (本インタビューの前に) 意味は調べた。

- 打たれ強さは知っていた。SES とも関係しているが、耐え抜く力、困難があった時に、乗り越えようとする力。ストレスがかかった時に。
- 育成することはとても重要。友だちと遊ぶ中で、自分の思い通りにいかない。思い通りに行こうとする子どももいるが、わがままばかりすると、友達と折り合いをつけられない、難しいこと (一輪車・コマ回し) も頑張ろうと思う力は、必要。

### 回答者 (M) <とらえ>

うまくいかないと思ったときにそれを乗り越えていく力。

### <レジリエンスがある子どもとは？>

たくましさ。そもそも、うまくいかなかったという挫折みたいなことに「ガン」とならない、挫折したと思わない子。前向き。したいことができなくても、今はできなくてもがんばったらできるようになる、今はできないけどこうしてみたらどうか、という自分なりの方法を考えられる。

### <育むことは大事か？>

大事だと思う。

### 回答者 (O) <とらえ>

今回のお話をいただいてからネットで調べた。逆境や困難や問題に当たったときに、どう自分が気持ちを切り替えていくか、どうやって回復するかという力。

### <レジリエンスがある子どもとは？>

お友達と喧嘩してしまったり、作っていたものを壊されてしまったりなど、子ども同士の中でのトラブルがあったときに、友達に思いを伝えて話をしたり、保育士に気持ちを受け止めてもらって、次の活動へ向けて自分で気持ちを切り替えていける子。

### <育むことは大事か？>

大事だと思う。たとえば友達と遊ぶときでも、Aちゃんが違う子と遊びたいのに絶対Aちゃんとならないと遊

ばない、となるのではなく、AちゃんがダメならBちゃんでもいい、などと切り替える力がすごく大事だと思うから。

#### 質問4a:「あなたが想定する4歳～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」とはどのようなことですか？」

回答者 (E) ・子どもが自分自身で期待していた能力と、実際にできることの間には差があること（自己評価と実際の能力のギャップ）。

・集団の中で他の子ができることを自分ができないと感じた時、心のダメージを受けることがある（集団内での自己の苦手さの認識）。

・子どもが自分の能力の限界や苦手なことを認識することは、子どもにとっての逆境となる場合がある。

回答者 (F) 日常生活の中、苦手なこと（運動・絵画）でうまくいかなくて、難しい、やりたくない気持ちの中で、いかに楽しくとらえられるか。本人次第。友達との関わりの中で、トラブルや、トラブル後の解決のための言葉がけ—子どもたちにとっては難しいと思う。

回答者 (G) ・自分がかねえたいこと、実現したいことが様々ある中で、うまく進めていくことができない。自分の力だけではうまくいかない。なかなか思うような支援が得られない状況。

・友達との関係の中でも自分が思うような関係がうまく作れない状況。

回答者 (H) 子どもたちの経験する「困難」や「逆境」

・自分で何かを成し遂げようとしてうまくいかない場合。

・子どもにとってどうしようもない状況、例えばコロナ禍における友達との交流の制限。

回答者 (I) ・自分が苦手なことに対して、その子がどうかかわっていくか。

・たとえば、みんなの前で発表することが苦手だと控えめになったり、その瞬間を避けたりしがち。でも、どこかで絶対しないといけないことであることは本人も分かっているので、少しずつ様子を見ながらかかわっていったり、自分なりに色々な手法で苦手なことにかかわろうとする。

・「発表」以外で子どもたちが苦手なこと：素直になること、運動、歌、楽器。一人ひとり苦手なことは違う。

回答者 (J) 友達との関わりの中で異なる意見や思いを受け入れる、折り合いをつけていくこと。スキルが必要な縄跳びなどの遊び、やったことがないがやってみるという場面。

回答者 (K) ・子どもたちが自分たちで考えたアイデアやプロジェクト（例えば、お店屋さんプロジェクト）がうまく実現しない経験。

・自分たちでメニューや劇の役割を考えるなどのクリエイティブな活動に取り組む中での困難。

・集団活動（例えば、発表会や劇の準備）を通じて、他の子どもたちとの比較や協力の中で自分の役割や能力を理解する過程。

回答者 (L) 入園した時の親との別れ。

親が手伝ってくれたことも園では自分でしなければならない。集団生活の中で、自由にはできない、我慢することもある。こういうささいなこともレジリエンスか。

虫が死んでしまうこと。友達と遊んでいて、思い通りにはいかない場面。縄跳びなどの新しい遊びで、うまくできない場面。

回答者 (M) ・挫折みたいなこと、「ガーン！」となること。

・集団として：運動会の練習で、どうしてもリレーで隣のクラスに勝てなかった。最初は「がんばったら勝てる」と言っていた子も、「無理、何回練習しても勝てない」となった。園に来てくれている外部の運動の先生に相談したら、「エイエイオー」を大きな声で2回言うこと、と言われた。1回目は自分たちに、2回目は相手に向かって「エイエイオー」を大きな声で言え、とのアドバイス。それを試したら勝てた。技術的なこと（走り方、手の振り方等）を子どもに伝えてくれるのかなと思ったが、気持ちの面でのアドバイスをくれた。子どもの意欲で結果が変わった事例。「どうせ今日は負ける」と思って走ると、「今日はエイエイオーの作戦があるから絶対勝つぞ」と思って走るの違い。子どもが乗り越えることができた良いエ

ピソード。

・個人として：人間関係、特に女の子。一緒に遊びたいが、相手はそうではない。自分はその子と遊びたい、あの子のことが好きなのに、思い通りにいかない。そのようなとき、自分のしたいことを我慢してその子のそばに行くのか、またはその子と距離をとるのか。大人になっても同じ、人間関係の距離の取り方で悩んでいる子どもがいる。

回答者 (N)・新しい遊びや活動に挑戦する際に直面する困難。最初からうまくいく子もいれば、難しく感じる子もいる。

・友達との遊びの中で自分の思いが伝わらないことも、子どもにとっての困難となる。

・例えば、5歳児が竹馬に挑戦する場面では、周りの子どもたちの関わりが助けとなり、最初はうまくいなくても再び挑戦するきっかけになることがある。

回答者 (O)・日々子ども同士のかかわりの中で見ていると、一緒に遊んでいる中で自分の思い通りに進まないトラブルが起こる。先生が間に入るが、お互い譲り合えなかったり、さらに言い合いが激しくなる。

#### 質問4b：「あなたが想定する4歳～6歳にとっての「うまく適応する」「立ち直る」とはどのようなことですか？」

回答者 (E)・落ち着くためのアイテム（絵カードや癒し系のオイル時計、触り心地の良いものなど）を使用して、子どもが落ち着くこと。

・成功体験を繰り返し、うまく対応していけるようになること。

・スモールステップで少しずつできるようになって、自分に自信を持つこと。

回答者 (F) ●**苦手意識が強くなると嫌いになる。運動能力など、自我が芽生える歳で、うまくいかないことをどうプラスに持って行けるかは、大人の手が入る中で、子どもの気持の変化、いかに大人に伝え、肯定的なことばがけをすることで、また挑戦。子どもたちなりに、うまく自分達で、適応できるのではないか。**

●**個人差があると思うが、どう関わり方を変えているか？**：変えている。例えば、多動な男子は、気持ちのコントロールが難しくなる理由があるときとない時がある。自己肯定感が下がりやすい子どもも多いので、自己肯定感があがるようなことばがけをするなど、意識をしている。「お友達のことを叩いたときは、「どうしたの?」「そうだったんだ」一いけないうちと伝える前に、本人の理由を聞いて、受け止めてもらえた気持ちになることが多い。「友達の気持ちはどう思う?」「次はどうしようか」というやり取りをする。都度、受け止めることで、子どもも少しずつ（よくなる）。大人がいかに受け止めて、肯定的な声かけをすることで、子どもが安定する。

回答者 (G)・人に助けを求める。考え方を変えて違う方法を試すことを続ける姿。友達との喧嘩の中でも自分の主張が通らなかつたら、友達の思いを聞いて理解が進んで、理解が深まったことでその状況が好転していくこと。そのために聞いていく、人に助けを求めて切り替えていく手段をとっていきける姿。

・5～6歳になってくると、人の助けがなくとも今までの自分の経験の中から、切り替えてみたり、違う方法を試してみたりできるようになる。あるいはひとこと言ってもらったことから考え方が変わることもあり、それがうまく適応している姿である。

回答者 (H)・助けを求めて援助してもらう事（どもたちが自分の力で課題を達成することも大事だが、必要な時に大人の助けを求めることも大切）。

・友達の行動を観察し、ヒントを得ながらチャレンジする事。

・何度も挑戦し、自分なりの方法を見つけて適応していく事

・何かに挑戦するときは、子どもたち自身が自発的に始めることが大事だと考える

回答者 (I)・「立ち直る」とは、苦手なことに対するかかわりがうまくなっていくこと。何か失敗したときに自分の中でなかなか切り替えられなかつたり、できなかったことを他の人のせいにしたたり怒りをぶつける場面もたくさんあるが、5歳児の後半になってくると、時間が経つにつれて自分の中で切り替えることが色んな子に見られる。友達同士のけんかでも、切り替えて自分から素直に謝ったりする。ダメだったときにはその場で反省して、あとは切り替えたり、他の子にそういうことがあったときに声をかけてあげたり、注意してあげたり、自分の経験がこれからつながっていきっていると感じられる。

・4歳はずっといじけたり、話をしない子が多いが、5歳児後半になると成長が見られる。相手の気持ちを理解する年齢になるので、そこで自分の中で折り合いがついてくる印象を受ける。

回答者 (J) ●大人からの励まし、コツをさりげなく教える、上手な友達をみるように促す。友達同士では、互いに思いを聞いて、共感と提案をしてもらって折り合いをつけていくことに繋がる。

回答者 (K) ・子どもたちが新しい活動やプロジェクト（例えば、お店屋さんプロジェクトや発表会）に参加する際、その環境や要求に順応し、自分たちで決定し、創造的に取り組んでいけること。

・活動中に起きる失敗や挑戦から学び、それらを乗り越えることで自信を持つこと。自信をもとに自分たちで作ったものが期待通りにならない場合、それを改善する方法を考え出す力につながる。

・集団の中での自分の役割を理解し、他の子どもたちと協力して目標を達成する能力。

・困難に直面しても諦めず、ポジティブな姿勢で問題に取り組む姿勢、力。

回答者 (L) 親との別れは、時間が解決する。安心すること。迎えに来てくれること、友達は優しいということが分かれば安心する。

虫の死は、調べたり、試したり、食べ物が分かる等。

回答者 (M) 意欲（かなえたいこと、こうしたいという気持ち、自分が理想とする像）をどれだけ強くもっているかが重要。運動会の話も、どうしても勝たたい！ という気持ちがあったから外部の先生に助けを求めたり、家でお父さんと公園を走ったりした子どももいる。本当は各々が努力して行っていたことが、タイミングよく「エイエイオー作戦」と重なって勝てたのではないかと思う。意欲があると、周りの人に頼ったり、友達に相談したり、自分で練習したりコツコツ努力したりなどの姿が出てくる。

回答者 (N) ・困難や挑戦に直面した時に感じる否定的な感情を、保育士の声掛けでポジティブな感情に変えること

・上手いかないときに、友達が頑張っている姿や、陰で教えてくれる等友達が助けを提供してくれることで、子どもが頑張ろうって気持ちが切り替わること

・5歳児なので、年中・年少さんに対し、保育所の中で一番上だから、お兄ちゃん、お姉ちゃんだから頑張ろうって思うこと

・年中・年少さんが5歳児が頑張っている姿をみて、自分も頑張ろうって気持ちを切り替えて適応していくこと

回答者 (O) ・お互いに思いをことばにして伝えあうことで、どちらか一方が「いいよ」と譲ってあげたり、話を聞き入れてくれたりして折り合いをつける。

・話がひと段落したら、そこからまた子ども同士で遊びがスタートする。

## 質問5：保育の中で、「レジリエンス」の概念を考慮されていますか？

回答者 (E) ・製作や運動など、ほとんどすべての活動を通して子どもたちのレジリエンスを育てている。

・マット運動や跳び箱などの体育指導を通じて、子どもたちが自分の期待と実際のパフォーマンスの違いに気づき、それに対応する能力を育てている。

・紙の持ち方やはさみの使い方など、基本的なスキルが特に苦手な子どもたちには、基本からじっくりとスキルを身に付けさせることで成功体験をもらい、苦手を克服する気持ちを育てている。

回答者 (F) 友達との関わり／気持ちの落ち込みやパニック時：園内に「リソースルーム（小部屋）」が複数あり、そこで自分の気持ちを落ち着かせるように絵本を読んだり、狭い小部屋で安心感、冷静になって、その後、話ができるようにしている。全園児対象。気持ちを静めて、また集団に戻る。環境を整えて、コミュニケーションが取れるように、一度、集団から離れることで、本人の中の気持ちがコントロールしやすいことがある。子どもはルームの存在を知っている。行くときは、大人が声かけをして、背中を押してあげる言葉をかける時もある。自分から入るときもある。子どもによって対応方法は変わる。

回答者 (G) ・レジリエンスに限ってではないが、自園の教育課程の中で言うと「自分の生き方」「人とのつながり」という大きなまとまりの中で、自分が何をしたいのかをはっきりさせて、それに向かっていく過程で気持ちをコントロールする力を育てていきたい。

・具体的には、何かうまくいかないことがあったとき「そんなときもあるよね」という受け止めのことばをたくさんかけたい。うまくいかなかったことは結果であり、その過程での子どものアプローチを評価したい。本人も、周りにいる子たちも、結果よりもがんばりや工夫に価値をもってほしい。過程を評価することを意識する。大丈夫という安心感がもてる声かけ。うまくいっている友達の姿も紹介。クラスでの遊びのふり返りの場面では、一人の困り感を共有する。教師と子どもだけでなく、子ども同士のかかわりの中でもレジリエンスを育ていける。一人の子どもが困難な状況に陥っているときに周りの子どもたちも一緒に考えることも大事。他者の感性や感じ方を知ることも大事。

・**子どもたちが人に助けを求めやすくする工夫**：周りの職員みんな、うまくいっている・いっていないだけで評価していないことを態度で示す。受け止めてくれる安心感を醸成し、子どもが言ってみたくてくれる雰囲気づくりを。一方で、自分で発信する、伝えていく力も大事。年少からいきなりは難しいが、自分から何かしら発信をすること。年少では態度で、4歳～5歳では言葉、単語で示すなど。自分のことを伝える力も育てたい。

・**レジリエンスを育む上での課題**：レジリエンスは後回しになってしまう。目に見える力の方が支えやすい、結果も見えやすい。いま子どもたちの内面で何が育っているのか、教師はどんなところを育てたくてどんな声かけをするのかということに、意識が向けられるかどうか。園の先生方一人ひとりがベースの考え方・意識を広くもつことが課題。

回答者 (H) ・幼稚園では、竹馬や縄跳び、こま回し、けん玉などの「挑戦し克服する」体験を通じて、レジリエンスを育む機会を提供している

・特定の教材やプログラムではなく、かるたやメンコなどの伝統的な遊びも大切にしている。ルールを設定し、公平性を保ちながらチャレンジすることがレジリエンスにつながると考える。

・子どもたちが自分で挑戦したいと思える活動を促進することが重要と考える。

・けん玉などは、自作のおもちゃを用いることで難易度を調節でき、子どもの発達に合った挑戦ができる。

・レジリエンスを育てるための特定の教材やプログラムはあまり導入せず、日常の生活や遊びの中で楽しみながら自然にこの力が育っていくことを重視している。

回答者 (I) ・**アプローチ**：「見守りと導き」を園の合言葉にしている。何か起こったときに子どもたちが自分たちで解決することを「見守り」、保育者が環境を準備したり、子どもたちがその力を発揮できるような状況をつくってあげることを「導き」と呼ぶ。この概念をもとに職員は子どもたちとかかわる。困難にすぐ手を差し伸べるのではなく、その子が力を発揮できるように、保育者は一歩離れて見守っていることが多い。

・**場面**：クラス内で喧嘩（議論）が多い。もめていることを当の本人が言いに来る。先生はすぐに入るのではなく状況だけを聞いて、基本的に見守る。理不尽なことを言っている場合は、相手の気持ちや、自分がされたらこう思う、だけを伝えて去っている。そうすると、そのときはすぐ素直になれなくても、子どももちょっと考え直して「ごめんね」と言いにいたり、行動を改めることがある。先生に言ったから何でも解決するわけではないことは、子どもたちも感じとっている。

・**「見守りと導き」の背景にある思い**：子どもたちにとって、自分たちで解決する力がこれからも必要になる。小学校では集団活動、担任は一人、時間割があって、自分たちで見ながら行動する必要がある。いまのうちに自分で考えたり、自分で動いたり、困ったときに誰かに助けを求める力が必要。園のどの職員もそう考えている。5歳児初期は先生と子どもの関係性を築くことが必要だが、後半になると見守る時間が増える（意識して増やすのではなく、子どもたちが勝手に育ってきている印象。喧嘩も、初期は仲介して何回も対処方法を伝えていたが、徐々に子どもたちの方から自分たちで解決しようとし始めた）。

回答者 (J) ●**アプローチ**：子ども一人一人の気持をよく聞いて、それぞれの気持を受け入れ、理解しようとしている。子どもがグループで遊ぶ姿を視野を広く持ち、把握していることは、自分もどの先生も心がけている。苦手、未経験なことを、経験できるようにさりげなく誘いかける。

●**実践か活動**：運動会に向けて遊ぶ中で、したことがない、縄跳び・フラフープ・竹馬（5歳）・2～3人でひとつのものをつくる経験。話し合う機会を4～5歳ならもつ。

●**育成やプログラム**：公立園なのでそこまでは導入はしていない。

●**レジリエンスに関わらず、子どもの様々な活動は取り入れているか？**：受け身ではなく自分で考えて行

動してみる、自分の意見を気持ちよく伝えることができる、いろいろな意見を受け入れることができる。

● (SES やレジリエンスの優先順位的は) 困難を経験して、友達存在によって乗り越えてほしいと思っている。

● (場面での働きかけは) 運動会の縄跳びは、ほとんどの子が諦めがちな競技だが、友達がやっているのをみて、自分もできると感じる。興味を持たない子に毎日声かけし、少しできたら褒める。小さい喜びを積み重ねられるよう意識。

#### 回答者 (K) (お店屋さんプロジェクト)

・年長児を対象に、お店をゼロから計画し、メニューを考え、素材を選んで実験するなど、お店屋さんのメニュー作りのプロジェクトを実施。このプロジェクトは子どもたちが自分たちで考え、実行し、困難を経験する過程を大切にしている。

##### (発表会)

・子どもたちが劇の内容やセリフ、役割を自分たちで決定する。その際上手くいかないことに直面するが、それらを通して子どもたちは自分で解決策を見つける力を育てる。

##### (日々の取り組み)

・絵本選びや役割決めなど、日常の保育の中でも子どもたちが自分たちで決断し、困ったことに直面しても乗り越える経験を積むことが大切だと考えている。成功経験が自信につながり、自信がレジリエンスの育成に寄与する。

##### (長期的なサポート)

・3年間を通して同じ子どもを見ていくことは難しいが、あえて子ども達のクラス替え、担任替えを通して新しい環境にチャレンジできるような機会を提供している。ただし、先生方と連携して個々の状況を共有し、偏りなく皆で育むようにしている。

##### (余白の活用)

・子どもたちが自分で考える時間を大切にし、具体的な指示ではなく、自由な発想の余地を提供することで、自立的な思考を促進する。

##### (職員間の協力とサポート)

・新任の先生も含めた職員間での情報共有や協力が積極的に行われており、それぞれのクラスで異なるアプローチを取りながらも、共通の目標に向かって協力している。先生方(特に新人の先生に対して)も自身のレジリエンスや社会情動的スキルを育てていこうと考えている。

回答者 (L) レジリエンスを育むために保育をしようと考えている保育者はいないが、日々の場面の中で、レジリエンスが必要なことは多い。

・サッカーのチーム分け、負け。コマ回し等。一できたという感覚を味わえるように支えることをしている。縄跳びは、5回「も」跳べていると、「これだけしかできない」ではなく「こんなにできた」という捉え。

・子どもが自分で立ち直れると思ったら、寄り添わず、見守るだけにするようにして、立ち直れたら、受け入れ、褒めるようなことを、保育者同士で連携を取りながら行う。担任の想いも、フリー保育者にしっかり伝える。子どもが自分で立ち直れる機会を逃さないようにする。

【環境】クラスは22人。もうひとクラスは21人(新任)。フリー保育者(ベテラン)が1人いて、配慮が必要な子に寄り添う。

● 先生が子どもと関係性ができたと感じるのはどういう時、一人で戻れるようになって感じる時は? : 半分の子は4歳児から知っているの、2年間の付き合いなので、「感覚」的なこと。要因、度合いによって、感覚で分かる。気持ちの調整を2年間で育みたい。いい笑顔で自分で帰ってくる。怒ることも2学期になって減っている。友達に言われたことを受け入れる力、状況を把握する力。

● うまく話せない子どももいる 一意図的な声掛け。保育者から聞いてあげる。代弁しない。自分で言う力をつける。

● うまく適応する/立ち直るのたとえで、親との別れ・虫の死を「わかる」について、「分かる」「理解する」を通して、立ち直るという視点は、普段からアプローチしているからか? 一教師が答えを言うと、子

どもが考える力を失ってしまう。図鑑のある場所をさりげなく言うなどという声掛け。子どもと一緒に悩んでみる。⇒子どもが調べようという気持ちになってくれるのではないか。

回答者 (M) ・スモールステップ。こうしたい！ と強く思っている子に関しては、そばで見守ったり、励ましたり、友達にかんばりを紹介する。が、そもそもできないことはやりたくないという子に対しては、「できなくてもいいんだよ。できなくて当たり前。できる・できないではなく、がんばろうとしている姿がステキなんだよ」と日々の中に入れ込んでいく。そういうところを逃さずに認めていくことを心がけている。

・ちょっとした成功をすかさずほめる。自分もやったらできると感じてほしい。自分のできることのちょっと先（ちょっとがんばったらできるかもしれないこと）にチャレンジできるような環境を用意する。がんばっている友達の姿が見えるような遊びの配置。

・園としては2学期までは、園内マップに子ども同士の遊びの場所を描き込み、どこでどんな遊びをしたら遊びがもっと広がるか、どんな風に関わりをもっていけるかを先生同士で話し合った。

・15分カンファ。パートの先生も同じ方向を向いて保育できるように、14時15分から30分までの保育後の時間に、毎日子どもの様子を話し合う。明日はどんな環境にしていけばいいか。この子にはどんな配慮があるか。レジリエンスに関わることだけではないが、子どもががんばっていたことを他の先生とも共有し合うことで、担任以外の先生も子どもへの声かけができる。

・失敗しても大丈夫と子どもが思えるように先生が取り組んでいること：できないと思うことを無理にする必要はないけど、その子がやってみようと思えるタイミングまで待つ。その子がやってみたタイミングで、できていなくてもメチャメチャほめる。先生がそのようにその子に声をかけることで、その子なりのがんばりが周りの子にも伝わる。その子自身も、例えばスキップがスキップの形になっていなかったとしても、それでいいと思えるようにする。不安が強い子どもはただ歩くだけだったとしても、その場に参加しただけで声をかけるなど、相手の状況を見ながら働きかける。

回答者 (N) ・子どもたちが挑戦する姿を認め、肯定的な言葉でサポートする。子どもたちは自信を持つことで、困難に立ち向かう気持ちが育つと考えている。

・竹馬や「よっちょれ」という鳴子ダンス、リレー、ドッジボールなど様々な活動を通して子どもたちに新しい経験をさせている。これらの活動を通して、勝ち負けを経験し、感情をコントロールする機会となり、レジリエンスにつながると考える。

・例えば、カルタや椅子取りゲーム、腕相撲などルールがある遊びを通して、子どもたちが葛藤を経験し、勝敗を受け入れ、結果に対する感情を受け入れ、乗り越える方法を学ぶ。

・例えば劇などの発表会において、子どもの自己決定の機会を提供し、意見を尊重する。異なる意見が衝突した場合には譲り合うことを学ぶ。

・最初は保育士が補助するが、年長に対しては、子どもたちが自ら考え、行動する機会を増やしている。

回答者 (O) ・子ども同士のトラブルがあった際には、2人がいる場でそれぞれの思いをゆったり聞く。「ちゃんとお話知りたいから教えて」と伝える。お互いに「これがイヤだった」「ああしたかった」と言ってくれる。その中で、「Aちゃんはこうしたいんだって」「Bくんはこうしたいんだって」という話をしながら、「このままだと遊びが止まっているけど、これからどうする？」と一緒に考える。2人で話せたらそれが一番だけど、そうではないパターンもよくあるので、間に入りながら解決策と一緒に考えていく。自分の気持ちが相手に伝わるように話をするんだよ、と伝え、言い方や口調も含めて、丁寧にかかわるようにしている。

・**言い方や口調の具体例**：子どもA「ばばあ！」など、言われたらイヤなことばを言ってしまう⇒子どもB「なんでそんなん言う！」と言って喧嘩になる。よく話を聞くと「こういう遊びを進めたかったのに話を聞いてくれないでイヤだった」とAが言うので、「ばばあじゃ伝わらないよ」と伝える。言い方が不器用な子もいるので、丁寧に話をかみ砕いて、「これがイヤだったんだね」「次はどうやって言おうかな？」など、ことばでの伝え合いができるようにかかわっている。

・他の先生も、子ども同士の思いをきちんと聞いたうえで、一緒にどうしていくか考えている。子ども同士で話せそうだったら、そばで様子を見ながら子どもたちで話し合えるようにかかわっている。

・ちなみに乳児クラスを担当していた頃は、子どもの様子を見ながら、「これがイヤだったの？」と、自分が子どもの気持ちを代弁するようにしていた。イヤだった気持ちをしっかり受け止めることも大事と思っ

てかかわっていた。

・**うまくいった事例**：一人の友達を取り合う姿が、春に比べて減ってきた。誰と遊ぶか何で遊ぶかは本人が決めるんだよ、という話は春先から続けている。秋を過ぎた頃から子どもたちも分かってきたのか、切り替えができるように。子ども同士でやりとりができるようになってきた。丁寧に子どもの思いを聞きながらかかわるのは大事。

・**失敗事例**：何回も同じできごとが重なってしまうと（先生自身が）「もう！」という口調になってしまう。自分の感情を出してしまう。言い方を気を付けようと思うことがある。

**質問6：園や日常生活の場面において、レジリエンスのスキルに関連するシナリオをご紹介します。4つのシナリオから2つかそれ以上を選び、選んだそれぞれのシナリオの子どもに対して、「保育者としてどう関わるか」「それはなぜか」を教えてください。**をたずねた。

### 1) 友だちから仲間外れにされた（仲間に入れてもらえなかった）

回答者（F）選んだシナリオ：1

友達から嫌なことをされた時は、クラス全体でその話をする。起こった時は、その場で個別に話をきいて解決するが、その後にクラス全体に、あったことを共有。個人名は挙げずに、大人が演じて、子どもたちがどう思ったか、意見や感情を聞き、「もし仲間外れにするのではなくて、違う時に遊びたかったのならどう答えたらよいか」クラス全員で考える。これからは、こうしよう、友達に言えなかったら先生に言おうね、まわりに認知されることで理解ができるようになることを、クラス内で行っている。⇒話せる環境があるということを知るといことも重要だと思って行っている。

回答者（G）選んだシナリオ：1

自分の一方通行のとらえで仲間外れにされたと思っていることが多い。相手には相手の思いや理由がある。それを聞くと仲間外れにされたのは結果でしかない。相手の立場に立って考えること、自分の状況を理解するために自分がどう行動することができるかを感じてほしい。「どうして一緒に遊べないと言ったか聞いてみた？」と、仲間外れにされた子にたずねる。一人で聞けそうになれば、一緒に聞きに行く。まず仲間外れにされてショックだった気持ちは受け止めるが、それは自分の捉え方が違っているのかもしれない（逆境と思っていたが違うかもしれない）。そのときの好き嫌いで言われていたのだとしたら、自分の思いをちゃんと伝えること。自分の思いを伝えることができれば自分の気持ちのコントロールもできる。

回答者（H）選んだシナリオ：1

- ・まず、仲間外れをした子どもたちにそれぞれの話を聞き、仲間外れをされた子どもと気持ちを伝え合わせる。
- ・お互いに言いたいことを言える場を作るようにしている。
- ・折り合いがつかない場合、当事者以外の子ども達も一緒に話し合うようにする。
- ・大人が駄目でしょうとは言わないようにし、相手の気持ちを察するような力を育てたいと考えている。

回答者（I）選んだシナリオ：1

5歳児には好みがあり、それが顕著に現れる。大人にも合う・合わないはあることではあるが、仲間に入れてもらえなかった子が悲しい気持ちになっていることは、仲間外れにした側には伝えるべき。仲間外れにされたと言いきた子に具体的な状況を聞いて、その子がうまく言えてなくて伝わっていなかったのだったら、もう一回その子に一人で言いにいってもらい、それでも入れてもらえなかったら、何でなのか一緒に聞きに行くことが多い。仲間外れにした子に、逆の立場になったときに、同じように悲しい気持ちになるけどいいの？と聞く。「いまはこういう理由でこのメンバーで遊びたい」など、理由があるのなら、仲間外れにされた子に伝える。「何で仲間外れにしたの！ 入れてあげなさい！」という対応はしていない。上記を先生が間に入っていくか、子ども同士が行うかについては、ケースバイケース。自分たちで話せる子もいるし、子どものことばで言ってもうまく伝わらない場合は仲介に入る。

回答者（N）選んだシナリオ：1

・例えば、一方の子が今は遊びたくないと感じている場合、他方の子は遊びたいという気持ちがある。まずはこのような状況を理解し、それに応じて関わるのが重要。

・仲間外れの要因としては、「遊びの好みや選択が異なること」、「特定の友達とのみ遊びたいと感じるが、その友達は他の子とも遊びたいと感じる場合があること」などが挙げられる。子どもたちの異なるニーズや好みを理解し、それぞれが遊びの中で快適に過ごせるようにサポートするよう心がけている。

回答者 (O) 選んだシナリオ：1

実際ときどきある話。一回話はするけど、どうしても入れてもらえなかったら、固執せずに切り替えて、次に進めるように話をしたり、次の遊びが見つかるまで一緒にかかわったりしている。

そのタイミングで入れてもらうのは違うかなと思う場面もある。たとえば、ブロックを2人で作ったのに、仕上げのときだけ別の子が「入れて」と言い出したとき。2人でがんばって作ったから、2人で仕上げで遊びたい気持ちも分かるので、そういうときには「いまは2人でがんばって作ったから、また後にしようか。違う遊びしてみる？」と誘ってみたりする。「自分が一生懸命作って、もうすぐ完成というときに、友達が『入れて』と言ってそれを持っていっちゃったらどう思う？」など、逆の立場だったらどう思うかと投げかけると、途中から参加したがっていた子も「いやや」と言って理解を示す。相手の気持ちが分かるように、具体例を伝えて考えられるように声かけをしている。

## 2) 友達と喧嘩した

回答者 (E) 選んだシナリオ：2

・まず、喧嘩した子どもたちにそれぞれの話を聞かせ、自分の気持ちを伝え合わせる。次に、折り合いがつかない場合、別の解決方法を提案し、子どもたちが受け入れることを促す。さらに、喧嘩の原因となった感情や気持ちを共有し、相手の気持ちを理解するよう援助する。

・お互いの気持ちを認め、それを受け入れることの大切さを教える。

・子どもたちが経験を積むことで、自分と友達の違いを認識し、理解することを促していると（先生は）考えている。

・もし喧嘩が解決しない場合は、無理に一緒にいる必要はないと教え、子ども自身が選択して良いということ伝える。

・子どもたちに、自分の感情に従って行動しても大丈夫だということ伝える、友達との関係において、まず自分を尊重することを伝える。

回答者 (G) 選んだシナリオ：2

仲間外れのときと同じ。きっと相手にも思いがある。喧嘩をしたり仲間外れにされると当人はショックで落ち込むが、そこは受け止めつつも、落ち込んでいるだけでなく何か行動を進めていける手立てをする。自分に何ができるのか。相手がどんな思いだったのかを知っていくと、結果、自分も納得できる。相手の思いが聞けたり、自分も思いが言えたり、につなげていける。

回答者 (I) 選んだシナリオ：2

友達との喧嘩は、基本的にいまは仲介に入っていない（援助が必要な子は一緒に行くが、基本的に子どもたちで解決するようにしている）。子どもたちも先生に聞かれたくないこともある。喧嘩しているときに「私入った方がいい？」と聞くと「いらん」と言われる。

喧嘩したら先生に怒られると思われたくない。それぞれの気持ちを大事にしたい。自分たちで解決できるなら折り合いをつける力にもつながるし、それが一番よい。

5歳の初めの頃は、いったんは自分たちで話してねと伝えるが、解決する力がなく自分の意見だけを言って折れなかったので仲介に入っていた。しかし当初から「必要なら入るけど、なるべく自分たちで解決してね」というスタンスで関わっていた。必要に応じて入って、気持ちの理解などはするが、なんでもかんでも先生頼りにしないでね、という態度でかかわるうちに、徐々に子どもたちが育ってきた。

・喧嘩を子ども同士で解決すると、声の大きい子が取りしきり、そうでない子が我慢しがちなのでは？

(回答) ケンカに関しては大体の内容は把握している。強くない方の子に「ほんまに納得してるの？」と

再度聞いたりしている。その子がよいと感じていたらヨシとする。気になることや上下関係については、サークルタイムでクラス全体の問題として取り上げる。サークルタイムは朝と夕方に実施するクラス全体の集会。

回答者 (J) 選んだシナリオ：2

大人が見た感覚だけではなく、双方の話をよく聞き、互いの思いに共感し、受け止めた上、互いの想いを知れるような場面を作る。互いの思いを受け入れたことで消化できる。決めつけず、双方の話を聞くように意識する。クラス全体にも話して、双方の謝罪や気持ちの受け入れができたことを話している。それぞれの思いは、それぞれも聞けるようにそばにいるような形を作る。状況により、その場で集団で話す時と、別途、報告する時とある。

回答者 (K) 選んだシナリオ：2

- ・喧嘩した当事者の子どもたちと保育者が話し合い、問題を解決するのが最も効果的と考える。
- ・周りの子どもたちを巻き込んで、喧嘩の状況を共有し、当事者でない子どもの意見を聞くことで、当事者だけでなく、他の子どもたちも問題解決に参加ができる。周りの子どもたちも、友達と喧嘩した際に相手がどういう気持ちになるか、自分がされたらどんな気持ちになるかを考える機会になる。
- ・保育者が直接的に問題を解決するよりも、子どもたちに自分たちで解決する方法を考えさせること大事にしている。
- ・問題解決後には、子どもたちにフィードバックを行い、自分たちで解決できたことを認識させる。

回答者 (L) 選んだシナリオ：2

喧嘩の理由を両者から聞く、背景を一緒に考える、相手の思いに気づかないことも多いので、相手の気持ちを分かり合えるように橋渡しする。

●他の園児にも広げる。年長になると、乱暴な言葉遣い等、誰にも起こりうる。1. 仲間外れとも関わってくるが、皆で考えるきっかけとなることが起こった時は、車座で考える。つるし上げるのではなく、他の子の意見もきいて、自分を振り返る。類似の場面が起こった時に、想起されるかもしれない。

●小学生が近づいた年齢なので、自己抑制の力がつく年齢>子ども同士で解決できるように、年齢・時期に応じて、働きかけている。

回答者 (M) 選んだシナリオ：2

どうして喧嘩したのか、それぞれに聞く。どちらにも言い分がある。幼児は自己中心的なところがあるので、相手の気持ちを知らせはするが、相手の言い分は、お互い分からなくてもいい。明らかにどちらかが悪いとき、善悪の判断が必要なときは指導を入れるが、そうではなく意見がぶつかっている場合は、相手が考えていることを分かりやすく知らせるぐらいにとどめておく。それに対して、子どもが納得しているかしていないかを見る。

幼児にとって、自分と相手は違う考えなんだ、ということの理解が難しい。幼児特有の自己中心性があるので、かたちだけで「ごめんね」「いいよ」しても意味がない。「ごめんね」しなくてもいいパターンもある。きれいに終わらなくてもいい。「先生はAちゃんの言っていることもBちゃんの言っていることもわかったよ」で終わらせる。見ていたら、10分後に仲直りしていることもある。あまり大人が入りすぎると、先生が言っているから謝らないといけない、となってしまう、それは違う。そこに自分の気持ちがないことになってしまう。誰か(先生)が聞いてくれたらそれでいい、また遊び出せることもある。

回答者 (N) 選んだシナリオ：2

- ・(5歳児の場合) まずは状況を見守り、その後に声を掛ける。
- ・喧嘩した両方の子どもの意見をじっくり聞き、理解を深める。お互いの前で行うことで、相手の考えを知る機会を提供する。
- ・保育者は中立的な立場で仲介し、子どもたちがお互いの気持ちを理解し、問題解決に至るよう支援する。
- ・たたいた側やたたかれた側が一方向的に悪いと決めつけない。子どもがそのような行動を取った背景や理由を理解しようとする。
- ・上手く言葉で表現できない場合、どこが嫌だったのか、どうして欲しかったのかを聞くことで、自分の気持ちをうまく伝えられるよう支援する。

### 3) 親しい周囲の人（大好きな先生や仲良しの友達など）が引っ越していなくなってしまった

回答者 (H) 選んだシナリオ：3

- ・子どもたちの悲しい気持ちに寄り添い、話を聞くことが重要。これにより子どもたちは自分の感情を受け止められていると感じ、その経験を乗り越える力を得ることができる。
- ・引っ越した友達にお手紙を送るなど、離れていても関わりを持ち続ける方法を提案する。これにより子どもたちは離れていても友達とのつながりを感じることができる。
- ・子どもたちと「あの子は何してるかな」と話す。一緒に思い出を振り返り、楽しかったことを共有する。子どもたちの感情に共感し、ポジティブな思い出を大切にすることを支援する。
- ・子どもたちに「また会える日がある」というような前向きな言葉をかける。これは子どもたちに希望を持たせ、現状を乗り越える助けとなる。

回答者 (J) 選んだシナリオ：3

- 友達との別れ一淋しさ、もっと遊びたかった気持ちを十分受け止める。消化できるように、皆でどうするか話し合い、手紙や絵を描いて届ける案がでたら、かなえたい。アイデアを出し合って考える。お別れ会ができれば、大好きだった気持ちを伝えて、心に空いた穴がましになるようにする。
- 特に仲良しな子どもだけでなく、集団でアプローチをするのか一特に悲しんでいる子どもがいたら、「皆でどうしてあげたらいいか」と皆で話し合う。

回答者 (K) 選んだシナリオ：3

- ・子どもが友達を失って落ち込んでいる時に、丁寧に接し、子どもの気持ちをサポートする。
- ・他の子どもたちを巻き込み、集団での遊びや活動を積極的に促進する。孤立していた子どもの友人関係が広がり、新たな友達を作る機会となる。
- ・周囲の子どもたちが、仲の良い友達が引っ越してしまって子どもを積極的に誘い、遊びに参加させるなどしてサポートしていた。これまで遊ぶ機会の少なかった友達との関係が構築された。
- ・当事者の子どもの交友関係が広がったというポジティブな経験として捉えることができるようになった。

### 4) 家庭内で辛いこと（親に叱られた、親同士の喧嘩、家庭内の雰囲気が良くないなど）があった

回答者 (E) 選んだシナリオ：4

- ・子どもが辛い経験をした時、まずはその子の感じていることを聞き、理解しようとする。
- ・次に、子どもが怒られた理由を話した後、その子を責めずに、保育者が子どもの味方であることを伝え、安心感を与える。
- ・子どもにとって保育者が、たとえ悪いことをした場合でも安全な場所であることを伝え、安心できる環境を提供する。
- ・「あなたも悪かったね」という言葉を控え、まずは子どもの感情を受け止めることを優先する。

回答者 (F) 選んだシナリオ：4

- 園の中では、保護者が仕事で忙しくてかまってもらえなかった、という愛情が満たされていない時は、翌日や週で様子が異なる。ささいなことでイラついたり、甘えが強い（担任のそばで遊ぶ）。⇒保護者に事情を聞いて、保育者が理解することで、甘えが強かったら受け止める／ささいなことでトラブルがあるとしっかり受け止めた上で柔らかく話す、否定的な言葉に反応することがある。家で保護者に褒められていないと、園で甘えを受け止めて上げた上、保護者を通じて子どもの様子を見守っている。
- 家庭での愛情の欠如は、わかるのか？**：かなりわかりやすい。仕事の環境など、夜勤のある仕事（看護師）は、夜、家に保護者がいないのは、子どもたちにとっては大きいこと。仕事の内容で否定することはなく、あくまで子どもの様子を伝える。母も、話を聞いてほしい、しかたのないことと受け止めた上で、話を聞く。難しいことではある。
- レジリエンスを育むには保護者との連携は欠かせないと思うか？**：欠かせないと感じる。園での友達との喧嘩は、保護者に伝えるべきことだと思うので、保護者との信頼関係も重要だと感じる。5歳児になる

と言葉が上手に出る歳であり、出来事があった時に、子どもたちの理由がある。伝えるべきところは、保護者に伝える。年度の開始時に、保護者にトラブルがあった際には、個人名を出して伝えることがあることを了承頂く。子どもたちから伝えた時はかみ合わないことがあるので、保護者が前倒しで保護者に話すことで、理解して頂いた上で、子どもが話した方が、保護者から受け止めてもらえることは重要。保育者以外にも、保護者に褒めてもらえることで、子どもは伸びる。保護者には、子どものよいことを中心に伝える。レジリエンスの中では、保護者と保育者の関係性は重要だと思う。

回答者 (L) 選んだシナリオ：4

まずは受け止めるしかない。家庭内のことに保育者が立ち入れるか。保護者に話すこともある。子どもの気持ちをまず受け止めて上げることは必要だと思う。保護者送迎の園なので、保護者と毎日、話ができる。

●子どもの方から家庭でのことは話してくれるのか？：きょうだい同士の喧嘩はよく話してくる。状況がわからないため、受け止めるアプローチをしている。

回答者 (M) 選んだシナリオ：4

・根が深い。どれぐらいつらいことかにもよるし、その子が悪いパターンもある。先生にそれが言えるかどうか、出せるかどうか。降園後の15分カンファで、最近ちょっと様子がおかしい、覇気がない、表情が暗い、という話が出ることもある。朝、保護者の方との離れ方がおかしい、など。子どもにあまり突っ込んだ話は難しいので、汲み取る。なんで今日こんな感じなのか探る。デリケートな問題なので、保護者に直接話すのは難しいこともある。どんなアプローチが一番いいか、探っていく。

・送りも迎えも保護者が直接来るので、毎日顔を合わせられる。日常的に保護者とコミュニケーションを取れる環境がある。保護者が荒れていると子どもも幼稚園でがんばれない。園では安心して過ごせるように、ほめる、スキンシップをとる。

回答者 (O) 選んだシナリオ：4

・実際ときどきある。この服着たいのに着れなかった、テレビ見たかったのに見れなかったなど、小さなことでお母さんに怒られて、朝からしょんぼりして登園する子がいる。問い詰めるのではなく、「何が悲しかったの？ どうして喧嘩しちゃった？」という風に、些細な会話の中でその子の気持ちを聞くようにしている。話をしているうちに、話を聞いてもらったことでその子の気持ちが落ち着いていく。子どもに共感しながら、「お母さんの気持ちも先生は分かる」と伝える（子どもが2人いるので）。「お母さんと約束決めるとか、服は前の日に決めておくとかしたら？」など、次へ向けての提案を先生がすると、子どもは賛同する。子どもが気持ちを切り替えて保育所で過ごせるように心がけている。

## 質問7：子どもたちのレジリエンスの到達状況をどのように測定／評価／判断されますか？（可能な方のみご回答ください）

回答者 (E) ・特にアセスメントツールはない

以下を判断基準に考えている

- ・気持ちの切り替えの速さ（子どもたちがどれだけ早く気持ちを切り替えることができるか）
- ・これまでの成功体験と失敗への対処（成功体験を積むことにより、失敗をしてもそれを乗り越える能力につながり、失敗後に気持ちを切り替えられるようになる）
- ・個々の子どもの特性の考慮（子どもたちの中には自然と切り替えが早い子もいれば、向上心や負けず嫌いな性格の子もいる。そもそもの特性を考慮する必要がある）

回答者 (F) ●評価はあまり意識したことはない。気持ちの切り替えの仕方は、個人差があり、伸びしろがある子どもがいたり、マイペースを貫く、のんびりした子どももいる。集団に入った時に、マイペースな態度があったりするので、子ども同士を比べたりすると、スピードの違いは感じるが、普段あまり意識していないので、難しいと感じる。

●「切り替えには個人差がある」－速い子どもの特徴は？：性格特徴としては、穏やかで、感情の波が激しくない子どもは、気持ちの切り替えがしやすい。周りと比べると速いと思う。穏やか以外にも、感情が

激しい子どもでも、気持ちの切り替えが速い子どももいるので、難しい。

●**保育記録等で工夫はしているか?** : アセスメントとしては、月1度、園内で事例検討がある。クラスの中での気になる行動を具体的に1つ挙げる。該当する子の発達状況も見た上で、気になる行動を取り上げ、他の保育者同士で支援方法を探す。発達面の先生に来て頂き、気になる子どもを見て頂いて、アセスメントを先生としていく時間も持っている。

●学年ごとにリーダーの保育者が集まって、それぞれの学年の該当する子どもの支援方法を見つけていく。次の月の初めに一か月の成果を話す時間がある。アセスメントのサイクルを作っている。

回答者 (G) ・子どもの日々の姿を見とる中で、記録。事実と解釈を分ける。教師の思い込みや先入観をできるだけ排除。  
・自園の資質能力の観点。非常に細かく、40 近くの観点で教育課程を編成している。小学校と共同で作成。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 (10 項目)」よりも詳細に捉えることができる。その観点をもとに、3 歳児から 5 歳児の 3 年分の目指す子どもの姿を各資質能力ごとに設定している。子どもの「気持ちをコントロールする資質能力」はどのあたりに来ているかを、教育課程のねらいのことばから評価する。

回答者 (H) ・特にアセスメントツールはない

以下を判断基準に考えている

・1 学期、2 学期、3 学期ごとに子どもたちの様子を振り返り、保育記録を基に評価を行っている。

(具体例)

・通園の初めは母親にすがって泣いていた子どもが、時間が経つにつれて、母親にすがらずに自立している様子が見られた。

・5 月の運動会で自分の力を発揮できずにお母さんにすがりつき泣いてしまっていた女の子が、3 学期での参観日にこま回しで上手いかなかったにも関わらず、自立して立ち直る様子が見られた。

回答者 (I) 同じ状況に遭遇したときに、その子が以前のかかわりとどう変わっているかを判断基準にしている。同じ子と喧嘩したときに前だったら折り合いをつけられなかったけれど今回は自分たちで解決した、素直に自分が悪いと認められた、など。そういうところに成長を感じている。

回答者 (J) ●統計をとることはしていないが、一緒に働いている職員や、同じ子どもの 4 月を思い浮かべて、こんなことが出来るようになったねということを振り返って共有すること、会議の場で、クラスでの個人的な成長や課題を提案して助言をもらったり、成長を共有する。

●ある特定のスキルの基準書などはないが、期ごとの個別の目標・課題は決めていて、期ごとに振り返る。会議でも共有する。

●**4 期にわたって記録** : 入所 / 夏まで / 冬まで / 年度末までの姿を振りかえることを行っている。園児一人一人についての振り返り。

●**レジリエンス以外でも、どんなことが目標として書かれているか?** : 生活リズムが乱れがちな子は保護者に声をかけて朝型に整える。生活面を丁寧に行う等。

●**資質・能力では何かあるか?** : 言葉で伝える力 / 相手に表現する力 / 自立する力 / 相手の気持ちを汲み取ったり理解する力 / 折り合いをつける協調性 / 自然との / 自分を大切にする力。

回答者 (K) ・特にアセスメントツールはない

以下を判断基準に考えている

・**個人の過去と現在の比較** : 子どものレジリエンスを評価する際、他の子どもと比較するのではなく、その子自身の過去と比較する。

・**行動や成長の観察** : 子どもの行動の変化を観察し、それを成長の指標としている。例えば、最初は意見を言えなかった子が意見を言えるようになったり、一人で遊んでいた子が友達と遊ぶようになったりすることを成長と見なす。

・**記録** : 日々の記録や学年末の指導記録などを通じて、子どもの成長や目標の達成状況を文書化している。記録をもとに、子どもの成長を具体的に追跡し、評価する。

・**教員間の情報共有** : 職員同士で子どもたちの成長や行動について話し合い、各子どもの状況を把握する。これらの情報共有が適切なサポートにつながると考えている。

回答者 (L) ●**保育記録** : 毎日ではないが、子どもの言葉、成長をメモして、他の保育者どうし共有するが、アセスメン

トツール等はない。

●**力がついたことはどんな時に感じるか**：好きな遊びの時間で、前できなかったことができるようになったりする姿を見て気づく。アンテナを張ることは必要。

回答者 (M) 個人の記録。記録の取り方は教師それぞれに委ねられていて自由、園としての取り組みではない。自分は子どものノートを作っていて、そのページを見たら、その子の主なことが書き留められている。個別懇談でおうちの方と話すときに役立つ。4月5月の様子といまを比べる。成長を振り返りやすい。最後に指導要録を書く際に役立つ。

回答者 (N) ・特にアセスメントツールはない

以下を判断基準に考えている

・子どもたちの行動や言動を通じて発達や成長を感じ取る。

・子どもたちが自分の意見を押し通さずに友達に譲ること、失敗や挫折を経験した後に「次はうまくいかかもしれない」と前向きに考えることなどが成長を示す。

・失敗を乗り越えることの大切さを知っていくこともレジリエンスにつながる（例えば、竹馬に乗れた時の喜びを友達や保育士と共有する）。

・年齢によってレジリエンスの表れ方が異なる。幼い子どもたちは自分自身で喜びを感じ、年長の子どもたちは友達と喜びを共有することも大きな喜びとなる。それらが自信となる。

回答者 (O) ・評価シートはないが、自分なりに、子どもたちの春からの様子を日々見ている中で成長してきたなと感じている。ちょっとだけ友達の話聞けるようになった、ちょっとことばで思いを伝えられるようになった、など。

・日々の成長で感じるのは個々の成長だが、最終的には集団での成長も意識するようにしている。

## 質問8：子どものレジリエンス到達状況について、保護者にフィードバックをされますか？（可能な方のみご回答ください）

回答者 (E) ・保護者に子どもの小さな成長や進歩を伝え、それを共に喜ぶことを大切にしている。

・逆上がりができるようになったり、工作で何かを上手に作れるようになったりすることよりも、出来なかったことを克服したという点に着目して伝えるようにしている。

・最近の保護者は、友達とうまく関わられるか、暴力ではなく気持ちを伝えられるかということに関心を抱いているので、丁寧に報告するようにしている。

回答者 (F) ●友達とのトラブルは、細かく保護者に伝える。子どもたちの理由は見逃さず、伝える。怪我をさせたような時は「園でしっかり伝えたので、家庭ではあくまで聞いてあげることで大丈夫」と伝える。子どもにとって、家庭でも同じことを言われるのは、嫌だろうと思い、家庭でぶり返さないようにしている。

●子どもたちにも、ゴミを拾った、本棚整理したことなど、クラス全員に話すようにしている。子ども達にもうれしいこと。保育者が手本を見せながら、子どもも真似して行うこともある。

●自己肯定感も重要。研修にいても、自己肯定感は話題となる。保護者の協力も重要。保護者の認知もあるうえで、子どもの自己肯定感を作っていく。どの年齢になっても、愛着の面で、自己肯定感はついてくる。家で親に褒められて伸び伸び育つ子どもは、落ち着いている。愛着があるので表情が穏やかである。子どもの心のケアは必要。

●（保護者へのフィードバックとして）子どもたちが何かできた時など、去年の様子と比べて、具体例を話すことで、苦手だったことができるようになったことは具体的に、子どもの前で伝えるようにしている。子どもたちも褒めてもらえてうれしい。子どもの表情もよくなる。よいこと、できたこと、成長を感じた面は、子どもの前で、具体例をあげて、子どもたちと一緒に共感しながら、伝えるようにしている。子どもも自己肯定感につながる。

回答者 (G) ・個人懇談を日常的に、降園後の時間に実施。1日一人、時間をとって話をする。その中で保護者に、具体的な姿でもってお伝え。先ほどの資質能力の観点とセットでお伝えする。

・学年全体の懇談会。3年間のねらい一覧を保護者にも共有しているので、それを持参してもらう。該当年

年齢の該当月のねらいを縦に見てもらい、子どもたちの具体的な姿と、資質能力として目指す姿との重なりを伝える。「いま大体この辺に来ていますね」と共有。

・ドキュメンテーションもホームページでアップして発信。子どもたちの活動の流れと、どんな力を発揮していたかについて、読みやすいように示す。最後のところに、資質能力の観点を使って、「この遊びで見られた学び」を示している。

・5歳後半のこの時期には、個人懇談で「うちの子は気持ちをコントロールする力が幼いと思っていたけれど、ちゃんと5歳になったら目指すこんな姿になってくるんですね」と話をされる。保護者の不安が解消されたり、学びを実感してもらえていると感じる

・保護者を巻き込むことのメリット：(回答) 学年懇談会での説明だけだと理解が真に深まらない。それは見えていないから。だから具体的に、ねらい一覧や資質能力を可視化。保護者も教師と同じように、関わり方が緻密になる。言語化されることでクリアになる。そこが園と家庭で共有されていると、とても話が通じるようになる。家庭でのかかわり方と園でのかかわり方の共有がスムーズ。同じ方向を向いて子どもを支えていける。

回答者 (H) ・保護者が子どもの送迎をしているので日々対話している。

・不安を感じている子どもの状況を母親が見て不安になってるような様子に対し、子どもの不安な状況を丁寧に説明する。さらに幼稚園でのサポートの方法や、今後の成長の展望を話しながら、応援するような声掛けをする。

・何かエピソードが生じたときは必ず母親にその日に報告し、成長を実感してもらう。

・保護者と連携することで子どもの成長がより促されると考える

(例)

人前に立って話すのが苦手な子どもが自分から誕生会の視界をやりたいと立候補。かつ立派にやり遂げたこと。

回答者 (I) 保護者全員に全員のことを話しているわけではなく、目立つ子（言い方がきつい、トラブルを起こす子が素直になった瞬間）について話す。そういう子はお家でも気にされている。プラスの側面を伝えることが多い。気になる子は家庭状況や父母の口調が子どもに影響している、割とナイーブなところ。成長したなど感じた瞬間や、困難なことに向き合う力の成長（苦手意識があったことへのその子なりの向き合い方など）も伝えている。

回答者 (J) ●毎日の送迎時に保護者に、成長の姿、課題を共有、保護者の子どもへの思いを何気ない話の中で把握。支援を一緒に考える。

●保育の写真を貼って、実際の子どもの表情や、何をしていたかが伝わるように掲示。保育の狙いや、出来るようになったことを記載して、成長を知らせる。

●個別懇談を年に1～2回実施。子どもについて話す機会を15分程設ける。

●送迎時にどのように伝えるのか？：保護者の様子を見て調整。状況を見て話し合う。(一クラス18人を担任1人と発達補助1人。)

●子どもがレジリエンスが身についていく段階で個人差は感じるか？：支援が必要な子どもに対しては、他の子どもよりも自我が強く、こだわりが強い。できないと次の一歩が踏み出しにくい。他の子どもよりも粘り強い関わりが必要。

●他の先生と共有して振り返るのか？：特に気になる子に対しては、共有する。全職員が一人一人の子を知るの難しいが、クラス単位だったり、主任やフリーの保育者は、書類で共有している。

回答者 (K) ・子どもたちの活動や成長を記録したドキュメンテーション（写真と文章を用い、発表会などの取り組みの様子や子どもたちがどのような力を育てているかなどを紹介）を作成し、デジタル配信している。

・毎月、担任が各子どものポートフォリオを作成し、その子とその月にどのように成長し、何に取り組んでいたかを写真と文章で保護者に提供している。

・日々の子どもの成長（心が動いたこと）等についてはその日のうちに保護者に電話やメール、アプリでタイムリーに伝えることを心掛けている。

回答者 (L) 送迎時に、今日あったことをクラスとしての育ちを保護者の皆さんにする。個別のよいこと、頑張ったこと

を、嬉しそうに伝える。子どものことを褒める。保護者も嬉しくなる。

・喧嘩して悲しい思いをしたことも話していく。

・園だよりなどの配布物で、自分達でルールを決める中で、我慢して調整したことでうまく行ったという事例など、大切にしていることを伝える。

・保護者会で、園長から、学期に2回ほど、幼稚園の取り組みや、子どもたちの成長・課題を周知。

・個人面談は、年2回ある（4月12月）。

●子どももいる場で褒めるのか？：子どもがいる場で、保護者に伝えようと心がけている。

●保護者を巻き込むことがレジリエンスの育ちにプラスになるのか、必要なのか？：親は家の中での子の姿しか見ていない。集団の中での姿を見ることが出来ない。友達との関わりの中で、子どもの成長を願って、保護者の踏ん張りどころを話すこともある。

回答者 (M) ・毎日保護者と会えるので、なるべくタイムリーに伝えるのが一番いい。具体的なエピソードでお話する。今日あったことや、できたこと。保護者と一緒に喜べる。

・行事、保育参観。行事については、3歳のときに大泣きだった子が5歳ではやり通す。タイムリーに具体的なことを話す。

・子どものレジリエンスを育てるために保護者のかかわりが必要と思うこと：改まってお伝えする場があまりないので、子どもたち自身が自分たちで乗り越えようとしていることの大切さを、クラスだより（月に1回）に載せる。ご家庭でも、お手伝いひとつでもいいので、子どもたちの自尊心を高めるような活動をしてみてください、とお手紙に載せて伝える。保護者は熱心なのできちんと読んでくださる。書いたことに対して「最近どうですか？」と声をかける。失敗しないように、という親心の否定はできないが、「やってみよう」とチャレンジする姿が大事」とお便りに書く。色んな遊びの中で子どもが育っていることを保護者に伝えたいが、それが一番の課題。

回答者 (N) ・送迎時や直接会える機会に、子どもの日常の様子や成長を詳細に伝えるように意識している。

・保護者には子どもの成長や、新たにできるようになったことなどの喜びを共有するようにしている。行事や保育参観などを通じて、子どもの頑張りや進歩を保護者に実際に見てもらいたいこともある。

・保護者の理解と支援は重要であり、保護者との関わりも子どもにとって大きな影響を持つと考える。子どもたちにとって、保護者に知ってもらいたいことや保護者から直接褒められることは自信につながり、更なるモチベーションになると考えている。

回答者 (O) ・子ども同士のトラブルで、うまく解決できなかったり、子どもがもやもやして帰ってしまったとき、子どもはお家でその話をする。お母さんが子ども側からの話しか聞いていないと、どうなっているのかと言ってこられる保護者もいる。なので、子どもたちとのかかわりの中で解決するのに時間がかかったとか、今日はゆずってあげられたな、気持ちを上手に伝えられたなというときは、保護者に会えたら、「今日はここがすごかった」「今日はこれを解決するのに時間がかかったので、お家でまたお話するかもしれませんが聞いてあげてください」などと伝えるようにしている。保護者は送迎時に登園するので、直接会える（時差勤務なので会えないこともある）。

・保育所での出来事は保育所で解決して気持ちよく帰ってほしい。大体は解決できているが、解決に時間がかかったり、話したけれどまだもやもやが残ったときには、保護者に伝えるようにしている。子ども同士のトラブルは、なるべく保育所で解決するが、おうちの人に話したい子どももいると思うので、何があったかを保護者に伝えておくことで、お母さんも子どもと話しやすくなると思う。保育所で起きたことを持って帰らずにお家での時間を過ごしてほしい気持ちもあるが、親が子どもの嫌だった気持ちを聞いてあげることで子どもも納得し、次に気持ちを向けるきっかけになる。